

スリエ・クツロエヅハ

巧技の愛性

譯 浩 尼 鷲

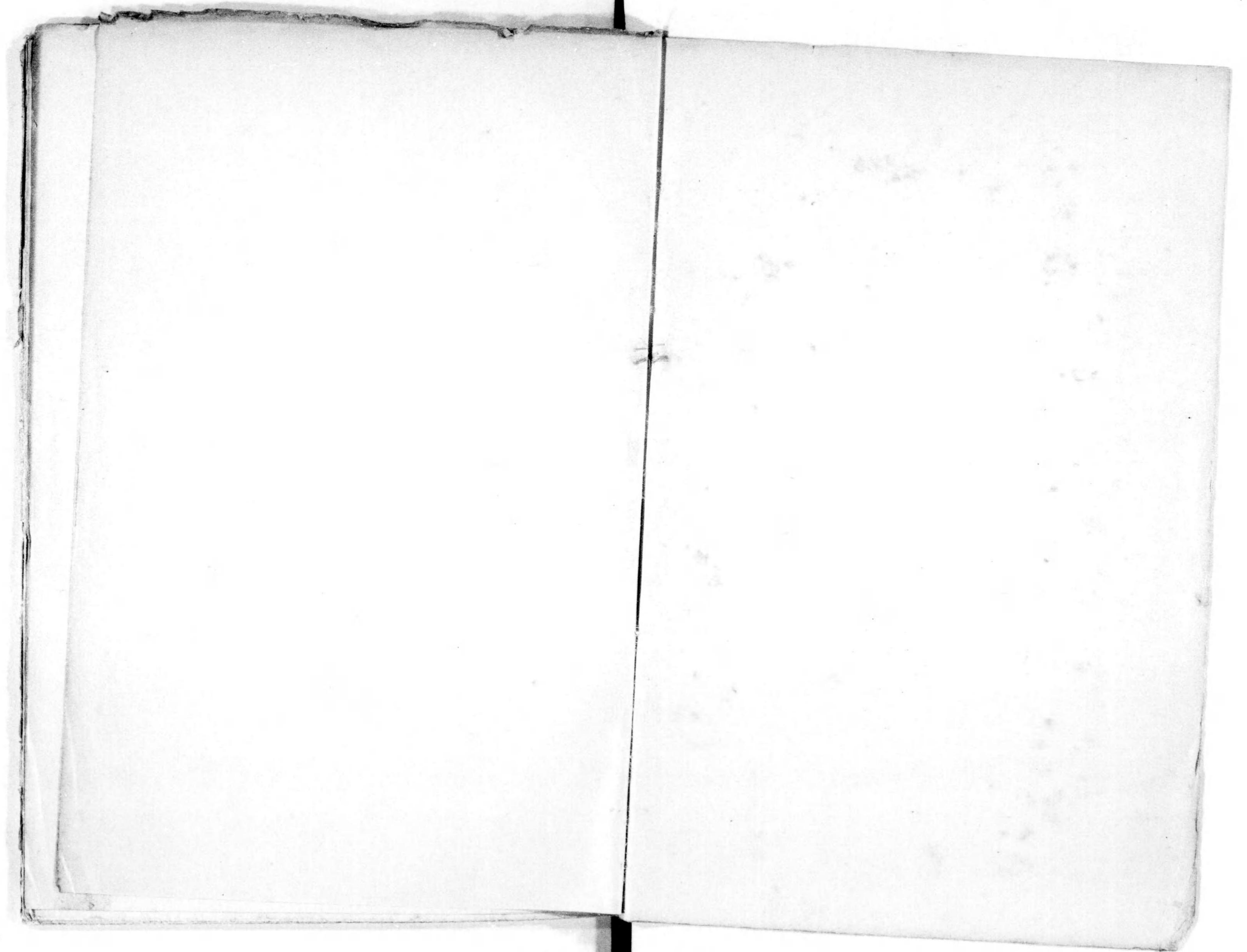


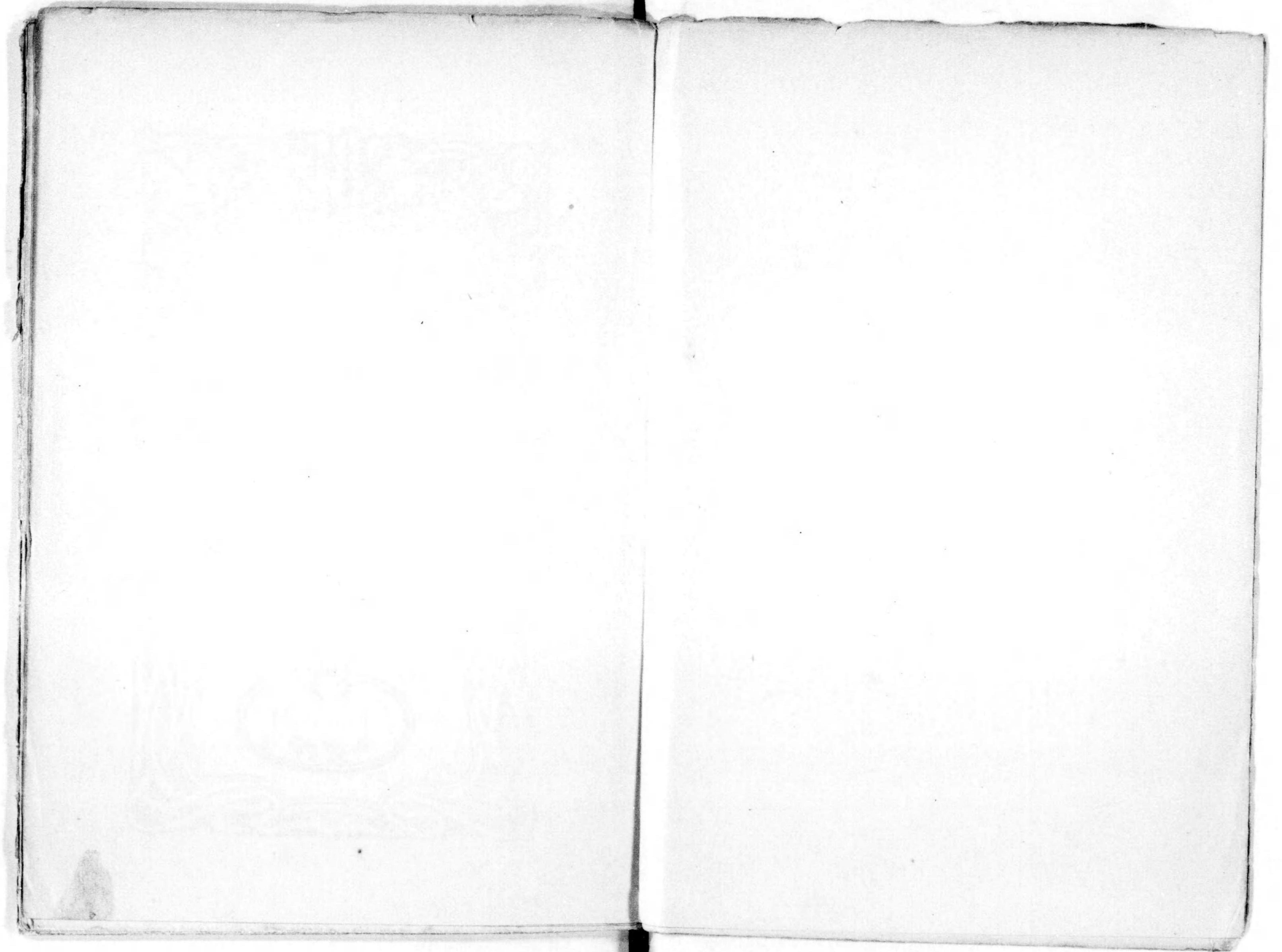
版 廠 社 夏 冬

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

始







特102
517



性愛の技巧

第一部 性愛の技巧

本書は性の心理第拾卷
な分冊刊行せるもの也

性愛の技巧

結婚は生殖のためのみならず——情愛の技巧の重要——結婚に於ける安定の基礎と正しき生殖に對する條件——離婚に對する防禦物たる性愛の技巧——近代道德の一元理たる愛と結婚との一致——基督教と性愛の技巧——原始人中の性愛の技巧——アフリカその他に於ける性的教導——原始生活に於ける性愛の技巧の自發的發達の傾向——たはむれ——女子の性的無智——性的教導に於ける男子の位地——男子に於ける性的無智——結婚に對する夫の教育——夫の無智に依りてなされたる害——不技巧なる交接の團體的及び精神的結果——女子は男子よりも良く性愛の技巧を理解す——交接の度數に關する古代及び近代の意見——性的能力に於ける相違——性的嗜好——媚惑の生物學的根據に基ける性愛の技巧——女子を喜ば

才技巧——音楽家に比較されたる戀人——媚惑の一部分としての申込——性愛の技巧の豫知——媚惑に於ける豫備の重要——不技巧なる夫は屢々妻の不妊の原因——媚惑の困難——同時に起る機能充進——女子に於ける不完全なる満足の害——交接の中断——交接の保留——人間の交接方法——交接の種類——交接の姿勢——交接に最良の時——結婚に於ける交接の影響——結婚に於ける空閑の利——空閑の危険——嫉妬——嫉妬の原始的機能——動物未開人中の、又病期中の嫉妬の有力——反社會的情緒——嫉妬は文明の進歩と矛盾す——同時に一人以上を愛することの可能——プラトニックの友情——プラトニックの友情を可能ならしめる條件——女子の性愛に於ける母的要素——結婚的愛の最後の發達……社會問題中最大なるものとなる戀愛問題。

以上述べたところから推して、あらゆる結婚には、それが完全なものである限り、二つの要素が含まれてゐることが明瞭になつた。即ち、一方に於て、結婚は相互の愛に依つて促進された結合であり、又、その單なる外形を離れた實性として、さうした性愛の教養に依つてのみ支持し得るものである。然るに他方に於て、結婚は、民族の繁榮と、子孫繁殖との目的を持つた一方法である。第一の場合、その目ざすところは戀を楽しむことである、第二の場合、それは親となることである。この二つの目的は古くから一般に認められて來たもので、一例として、イリギス教會での結婚式を舉げて見る。其處では、結婚は、「相互の團結、一が他に持たなければならぬ救助と慰安」とのためであると同時に、「子供の生殖」のためであると説かれてゐる。相互の愛といふ要素なくしては、生殖のための適當な條件は存在しない。生殖といふ要素なくしてはそれ自身が如何に美しい、神聖な關係であらうとも、眞の意味に於ては、私の關係に過ぎず、結婚としては不完全であり、社會的意味を持たないものである。それ故、上

述した結婚概論を補つて、性愛の技巧と生殖の科學とを述べ、究局の、より密接な結婚論を此處に述べる必要がある。

性の心理

近代に於ての傾向は、生殖の要素を排除して、結婚關係を、絶対に兩者相互の關係に在ると認めて來た。が、再び注意する必要はないけれど、社會的見地から、子供のない結婚は、如何にそれがその夫婦にとつて重大なものであらうとも、何等社會的意味を持たぬ關係であるといふ事實——その事實を離れて、更に、子供のない場合にはその個人的戀愛生活そのものさへ悩みがちになる、といふことも言はれなければならぬ。何故といふに、普通の戀愛生活に於て、殊に婦人に於て、性的愛は、親たるの愛に轉化する傾きを持つてゐるからである。且つ、相互の愛と信頼との充分な發達を得るのが困難であり、そしてその最も密接な羈絆と、新しい人物を作るといふ兩者相互の共力とを缺くのである。従つて完全な結婚といふものは、その充分な發達に於て三

體、即ち子供のあるべきものである。

結婚から戀情的要素を根本的なものとして、或は、嚴密に生殖の目的に従屬してゐる場合にのみ默認することを得るものとして、排除しようと試みた者は、時々、いろんな時代に現れた。古代人でも、希臘人、羅馬人は、結婚から戀情的要素を排除することを説き、且つ、男子にあつては、結婚外の關係を制限する必要なりと主張した。古典的因襲に囚はれてゐたモンテイヤは、結婚から戀情的興味を除去すべき理由を、堂々と述べ立ててゐる。即ち、——

「人間は何と言ひ得ようとも自己のために結婚すべきではない、子孫のため、家庭のために結婚すべきである。結婚の習慣及び利害は吾々自身に關する以上のものである……かくしてこの神聖な家系にあつて、色慾に没頭するのは、近親相姦に類することである。」

かうした意見は初期基督教徒の間に見られるもので、彼等は結婚に於ける戀情的興

性の愛の技巧

味を見落してゐる。「生殖以外の目的で交接を行ふことは、自然に對する罪惡である。」とアレキサンドリアのクレメントは言つた。以下、これは下等動物の場合には全くの眞理であるが、人間の場合、殊に文明人の場合は眞理でない、吾々の性的必要は、一般動物間のそれよりも遙かに發達してゐる。動物の性慾といふものは生殖の必然に伴ふ交尾期以外には存在しないが、人間の場合は、生殖の問題が考へられない時でさへ性的の愛が強く要求され、最も純化した精神的發達の状態にさへなつてゐる。それ故カソリック教會は、生殖のため以外の性的關係も排除するところの結婚に於ける禁慾を認めながらも、生殖以外の交接を、非常に寛大な態度を以て、單に許さるべき罪であるとした。それはセント・オウガスチンに従つたのだつた。然るに此處に千六百七十九年のこと、インノセント十一世は「快樂のためにのみ行ふ性的行爲は、許さるべき罪からも放免する」といふ數條を發したのである。

新教派な神學者たちは更に進んだ傾向を持つてゐた。克蘭マアは千五百四十九年

自分の結婚式の時、生殖と同時に「相互の救助と慰安」とが結婚の目的であると述べた。(ウイック・レツグの「教會論文集」)ホワアドの「結婚制度」(参照)近代の神學者たちはもつと明瞭に言つてゐる。例へばノルスコートは「性的行爲は愛の行爲である。適當に行へば、個人を倫理的幸福に導き、一箇の社會人としてのその能率を増進する行爲そのもの、及びそれに伴ふ情緒は、肉體的に於て、廣い心的生活の強烈な運動を刺戟する。」と言ふ。(「基督教と性の問題」参照)ずつと古代にあつても、シユライエルマツヘルの如きは、個人の精神的發達に對する愛の大きな意義を指摘してゐる。

エドワアド・カーペンタアは、その「時代の愛の來訪」中に、性的愛は單に肉體的創造のみでなく、亦精神的創造であると説いてゐる。プロツシュは又、この問題を論じて「現代の性的生活」(参照)から結論してゐる。「愛及び性的抱擁は單に生殖の目的を有するのみならず、それ自身の中に目的を持つてゐる。そして生活のため、發達のため、個人そのものの内的生長のために必要なものである」と。

性の心の理

相互の愛を結婚の要素として認める或人々に依つて、一度最初に認められたさうした愛は假定せらるべきもので、それ以上の論議を必要としない、といふことが説かれてゐる。性愛の技巧は學ばるべきものでもなく、教へらるべきものでもない、それは自然から来る、と彼等は信じてゐる。何物も眞理より以上には在り得ないが、殊に文明人に關してはさうである。交接の根本的事實でさへ教へられる必要がある。嘗てサア・ジエームス・パゲット位に、性的事實に就いて厳格な清淨教徒式意見を發表した者はないけれど、而もそのパゲットでさへ（その講演「性的憂鬱症」に於て）かう言つてゐる。

「性的事實に就いての無智が、人類の中でも文明人間の一大特徴であるらしく思へる。吾々の間に於ては、交接方法が教へられる必要のあること、教へられない者は、それに就いての智識を全然持たないままでゐることが確かである。」と。

性の愛の技巧

ガラアドも同じやうなことを言つてゐる。即ち、青年には、ロングスの牧劇中のダフニスやうに、かうした問題に關して、理論的のみならず、實際的にも、堅實教育を與へる要がある。そして婚期に際して母は娘を、父は息子を、それぞれ教へなければならぬ、と。哲學者たちは昔からこの問題の重大なことを認めて論じたもので、例へば、プルタアクが述べてゐるやうに、かのエピキュラスは、交接に適當な時といふ如き、各種の性的問題をその弟子に説くのを常としてゐた。然し當時も、現在のやうに、非開化主義者があつて、この人生の中心的事實をも、偶然、又は無智のままに放擲して置き、敢てこの哲學者エピキュラスを非難したものである。

然しながら、この問題には、單に性交の基本的事實以外に尙多くの學ぶべきことがある。性愛の技巧は勿論性的衛生の根本的事實を含んでゐるが、それと同時に、結婚の戀情的規律の凡てを含んでゐる。この理由があるからこそ、その意義が、個々人の幸福のためにも、性的結合の安定のためにも、間接には民族のためにも（性愛の技巧

は結局生殖の正當な條件を得る技巧である以上、實に重大なのである。

コオプ教授はその「結婚問題」中に書いてゐる。「若しこの問題が適當に理解されて、その實際行爲の詳細に互つて、書かれたる社會的科學になつたならば、一夫一婦の結婚は、屢々實際生活に見られるより以上に、一般の成功を得たかも知れなかつた。」これは前論のことである。大抵の結婚の成功不成功は、専ら當事者たる男女の持つてゐる、性愛技巧に關する智識の多寡にある。生涯の一夫一婦の結合が實際、宗教的忍従或は愚鈍のために、先天的及び後天的の性愛技巧を全然缺如したままで持續される。然しその態度は今は一般的でなくなつた。吾々が前章で見た如く、あらゆる文明諸國では、離婚が、より頻繁になり、より容易になつて來た。これは文明の一傾向である。そしてこれは、その結婚が眞の關係でなければならぬ、關係として眞でなくなつた場合には形式としても止めなければならぬといふ要求から生じた結果で、現代の趨勢たるデモクラチツク化に含まれる不可抗的な一傾向である。何故と言ふにデモクラシイ

は、神聖ではあつても、形式よりは實質を採るものであるから。吾々はそれと争ふことは出来ない。又たとひ争ふことが出來ても、その争をするのは不可なことである。

而も、吾々は離婚の傾向を助長し、且つ、堅實なる結婚にはそれを支持しようといふ兩者の意志を要する、と主張することを餘儀なくされながらも、その離婚そのものが望ましいものであると説くことは何人にとつても困難である。それは常に失敗の懺悔である。二人の人間が、若し少しでも、性的選擇の正當な衝動に依つて動かされたならば、最初に互ひを可愛く思ふのであるが、やがて一方か、或は双方かが、可愛くないことが明らかになる。其處には、性愛の根本的技巧に於ける失敗がある。若し吾々が離婚の容易を平衡しなければならぬとすれば、その唯一の健全な道程は、結婚の安定を増すことにある。そして結婚の安定を増す唯一の方法は、性愛の技巧を、結婚の根本的基礎を、養成することである。

この點を力説することは決して不必要ではない。今日依然としてこれを悟らない人

が多勢あるのだから。世の中には、性交中の、快感の有無は重大なことでないと思つてゐる人さへある。「性交に伴ふ相互の快感が生活の幸福に對して何等か特殊の關係を持つてゐるとは信じない。」とホワアド・エイ・ケリイは（千九百年、アメリカ醫學協會のコロムプス集會に於て）言つたことがある。こんな言葉に若し何等かの意味があるとしたならば、これは、結婚は人間の幸福に何等「特殊な關係」を持つてゐないといふ意味、姦通も離婚も自由でなければならぬといふ意味である。中世紀の最も厳格な禁慾主義者でさへも、この人類の經驗に反した言葉を臆面もなく述べ立てはしなかつた。それに、この二十世紀の有名な婦人科醫が、殆んど自明な眞理を語るやうな調子で、こんなことを語り得るといふ事實は、今回性愛の技巧を説く必要のあるといふことの有力の證明ではないか。エレン・ケイの言ふ通り、近代の道德に對しては、性愛と結婚との一致が基本的の原則である。

性愛技巧の無視は世界的の現象ではなかつた。それは殊に基督教國の著しい特徴な

のである。古羅馬の精神が、疑ひもなく、ヨオロツバをして、さうした無視に導いたのであつた。何故といふに、羅馬人は、その軍隊式の粗野な教養と、文明の體裁のいゝ外形とのために、性愛を許さるべき放縱であると認めただけで、技巧として學ぼうとはしなかつたから。この點に於て彼等の詩人は、その最良の人々の道德的感情を表現しない。自ら性愛の技巧に關係のあるラテン詩人として有名なオヴィ、が、その技巧を道德といふよりも不道德の方に結びつけたことは頗る意義がある。彼の考へに依ると性愛の技巧は女性の家庭内に保留して置く技巧ではなく、それから脱却せしめる技巧である。夫の技巧でなくして姦夫の技巧である。こんな考はヨオロツバ以外の處には在り得ない。

技巧としての性愛は、情熱と同様、古代人間に著しく研究されたものであるらしい。但し、その研究の結果は現存してゐない。スイダスの語るところに依るとカドムス・ミ

レシウスは性愛の情熱に就いて十四冊の大著述をしたといふが、それは今日一冊も發見されない。ロオドは、性愛に就いて書いたギリシヤの哲學者のことを簡単に述べてゐる。プロツシユは、性愛技巧を扱つた古代女流作家を列挙してゐる。モンテイヌは（その「論文集」に於て）現存しないところの性愛に關する古典の表を示してゐる。パアトンも（その「憂鬱の解剖」に於て）性愛に關する現存しない書物の表を擧げてゐる。パアトン自身は性愛の各種の徴候と、その憂鬱的特徴とを詳細に扱つてゐる。十八世紀初期のポイシエル・ド・ソウヴェヂユは、性愛を稍々パアトンと似通つた精神で論じ、これを治療し得る肉體的疾病であると認めた。

基督教的禁欲主義の萌芽は性愛を看過した。それは昔日とは違つて最早養育すべき技巧ではなくして、單に治癒すべき疾病であつた。この點に於ける古典的精神の眞の繼承者は、他の多くの點に於けると同様、基督教的の世界ではなく、イスラム教の世界であつた。シエイク・ネフザオウイの句へる花園は恐らく十六世紀、チュニスに於て、

チュニス南部に屬する作品に依つて書かれたものである。その堂々とした言葉は明らかに、それが性愛を疾病とする概念から遙かに離れてゐることを示してゐる。「神は女子の自然の部分に男子の最大快樂を置き、男子の自然の部分をして女子に最大の享樂を與へしめ給ふ、讀むべきかな。」アラビヤの書物「性愛の秘密法」は、ムーア人を母としトルコ人を父としてアルギエルに生れたオメル・ハレビイ・アブ・オスマンの近代的作物である。

基督教にとつて、性的衝動に與へる許可は要するに單に、人間の弱點に對する讓歩であり、それが各方面に互つて慎重に守られる場合にのみ許さるべき放縱であつた。その殆んど最初から基督教徒は、處女性の技巧を養成し始めて、性愛の技巧を是認するやうな意見にはならなかつた。性的方面に於ける彼等の情熱的崇拜は童貞といふ方向に向つて行つた。彼等はさうした思想に囚へられて、人間の性愛を單に、その特殊の

形に宗教的神聖な性質を賦與することに依つて忍んだのである。そしてその神聖な後光でさへ、性愛に、性愛を技巧として認める思想を排除するところの、禁慾的性質を與へたのであつた。(一)性愛は宗教的要素を得たけれども道德的要素を失つた。基督教以外にあつては、性愛の技巧は性的道德の(さうした道德が少しでもある限り)基礎部分である。基督教國に於て、結婚に於ける性愛は、それ自身のために、出来るだけ部分のいいやうに變化した。——性愛の技巧は、不道德に或通路を有する怪し氣な技巧であるばかりか、それ自身が不道德そのものであるとさへ考へられた。その感情はオヴィドが性愛技巧の文學に於て最も著名な大家であつたといふ事實に依つて一層強められたのである。彼の文學的名聲は、現在吾々の想像以上のもので(二)、性愛技巧の重要な教科書作者としての地位を得てゐた。オヴィドの「アルス・アマトリア」は人文主義と文藝復興と、基督教が人生の一方面を看過してゐたといふことの實感とを以て、それが嘗て占めなかつた土臺の上に置かれることになつた。それは文明に於け

性心の理

性愛の技巧

る一階級を示してゐる。それは性愛を單なる動物的本能とせず、或複雑な、人間的な教養を要する純化した關係であるとした。ボツカチオは賢明なる教師にオヴィドのアルス・アマトリアを青年に讀ませるやうにさせた。また中世的の精神に囚はれてゐる時代にあつて、それは必要なる教科書であつた。けれども、善良な社會的秩序の要求から離別したやうな個人の戀愛的要求を示してゐるので、教科書としては致命的な缺點を持つてゐた。それで一般に容れられる性愛の書物としては認められず、多數人の眼には善良な道德の制限外にある物とされてゐたのである。

然し吾々が更に廣く調査して、世界の各地方の青年に與へられてゐる、人生のための規律を研究して見ると、屢々、各様に理解された性愛の技巧が、その規律の根本部分を占めてゐるのを見る。原始人の教育方法のやうに、彼等は簡單に、結婚の關係に於て、女子が男子に心地よく、男子が女子に心地よくなるやうな技巧を修練することが罕ではない。そして屢々、媚惑は結婚に對する單なる豫備のみならず、又生物學的

に結婚關係全體を貫く根本的要素であることを、多少漠然と語つてゐる。

性の心理

(註一) ハイブリッヒ・メイエル・ベンフェイは、フリードリッヒ・シュレイゲルの「ルシンド」を論じた有名な論文の中で、結婚に關するカソリック教の神聖な概念が性を許したけれども、それを高めることに失敗したと指摘して、「ルシンド」を、その缺點があるにも係はらず、感覺と靈魂との一致を説いた最初の表現として性愛の新倫理の基礎となる程であると認めてゐる。けれども、それよりも四百年前に於てポンタノオがシュレイゲル以上に明快に、この同じ戀愛的一致を述べてゐる事實を言つて置く必要がある。

(註二) 十三世紀から十七世紀に互つて、實際オヴィドは最も著名な古典詩人であつた。殊にシエクスピアはその文學的活動の初期に於て彼に負ふところが多い。(千九百九年四月のクオウタアライ・レヴィウ所載、シドニイ・リイの「オヴィドとシエクス

ピアの短詩

性の愛の技巧

性的教導は中央アフリカのアヂムバ地方に於て頗る徹底的に行はれてゐる。エツチ・クロウフォウド・アングスはヨオロツパ人としてこのアヂムバスを訪問した最初の間であるが、彼等と共に一ケ年を暮し、少女の「教導式」といふ本を書いてゐる。――「少女に月經の最初の徴候が現れると、彼女は女性たることの神秘を教へられ、關係の各種の位置を示される。そして月經の凡ての徴候が終ると、村中の女に舞踏會の通知を發する、この舞踏には男子を入れないので、私はそれを見るに非常に苦心をした。當の少女は森の中から母親の小舎に連れられて、その舞踏の日の朝まで一人でぢつとしてゐる。そして朝になると指定の場所で地上に横たへられ、舞踏者たちはその周圍に輪を作つて並ぶ。舞踏の目的は少女に結婚生活の智識を與へるためである。夫に忠實であるやうに、子供を得ようとして試みるやうに教へられ、又、夫を誘ひ樂しませて自

分の力の下に保留するやうな各種の技巧や方法をも教へられるのである。」

ザンデバルの海岸と同じでアビシニアでも、ステツカアの言葉に依ると、少女が臀部の運動を教へられるといふ。この運動は廻轉式のものでデユク・デユクと呼ばれてゐる、このデユク・デユクを知らないことは少女にとつての大不名譽なのである。ザンデバルのスワヒリの女は實際、腰の運動を一生懸命に學んでゐる。殊にそれは海岸地方で流行するので、スワヒリの女仲間では、これを知つてゐなくては「貴婦人」とは言へないのである。六十人から八十人位の妙齡の少女が一日の中約八時間、この練習をしてゐる、この舞踏のことは、ザツチエが詳細に書いてゐる。普通以上に完成された踊り手は一般の尊敬を博する。この真似の後半になると、その少女の熟練と自制を試みる目的で、いろんな事が課せられる。例へば、彼女は踊りながら火中に飛び込んで、縁まで水を満たした器を、零さずに取り出さなければならぬ。三ヶ月間でこの教練も終つて、少女は晴着を着て家に歸る、やつとそれで結婚の資格が出来たわ

けである。ダツチユ・イースト・インデイスその他の地方でもこれに似通つた習慣があるといふことである。

ヘブリウ人は、勿論結婚に於ける性愛技巧に關聯した性的舞踏を持つてゐた。ギリシヤ人の間でも、その弟子たるロオマ人の間でも、熟練と教養とを要する、技巧としての性愛の概念が尙残つてゐたが、その概念は、基督教に依つて滅ぼされてしまつたのである。何故といふに基督教は、結婚式こそ神聖なものとしたが、正しくその間答たる性的愛の價値を落してしまつたのだから。

千百七十六年に、愛は結婚と一致すべきか否かといふ問題が、シヤムパニウの或男爵と貴婦人とに依つて戀愛裁判所に提出されたことがある。「否」と男爵は言つた「私は結婚した夫婦の甘い親密を讚美し尊敬する。けれどもそれを稱して戀愛と呼ぶことは出来ない。戀愛は障碍と神秘と盗まれたる恩恵とを欲する。然るに夫妻が大膽にその關係を公言して相互に矛盾も束縛もなくして所有する。して見ればその經驗すると

ころは戀愛ではあり得ない。」

婦人裁判官は熟考の後、この男爵の結論を採用した。(ド・ラ・ベドリエール著「フランス風俗史」)勿論、男爵の議論には或眞理がある。而も、如何なる非基督教國に於ても、戀愛と結婚とが一致しないといふことが是認されるかどうかは疑問である。然しこの議論は、中世期の貴族仲間にあつたやうに、結婚が單に政略的或は家庭的の盟約に過ぎず、随つて道德的向上の一方法では有り得ない場合には、避け得ないものである。

性心の理

十八世紀の末葉に於てレティフ・ド・ラ・ブレトンヌは疑問を發してゐる。——「道德性を持つてゐない女たちが何故、誠實な女よりもより誘惑的であり、より可愛いのであらうか？ それは彼女等が、優美と肉感とを學んでゐたギリシヤの娼婦のやうに技巧を學んでゐるからである。現代の愚かな悪口屋たちの中には、一人として、正直な女たちに可愛がられる方法を暗示してゐるところの、彼女等の哲學的目的を察してゐる。」

性愛の技巧

る者はないのだ。私は古代人の間にあつたやうな、教導の制度を見たく思ふものである。……今日、人間の幸福は偶然に委棄されてゐる、女子の經驗は凡て、動物のそれのやうに個々のであつて、唯、娼婦のみが、それを皮相的に學んでゐる。而も彼女等の受ける教課は、大抵は、尊敬すべきギリシヤ、ロオマ婦人のそれが神聖なものであつたやうな工合に、危険なものである。彼女等は淫奔に走り、財布や肉體的機能のやうに疲勞に走るのみであるが、古代婦人のその目的は、夫と妻との結合、快樂を通しての相互の愛着にあつたのだ。基督教は、その神祕を汚れたものとして滅ぼしたが、吾々は、この滅亡を、基督教が人類になした惡の一つであると認めていゝのである。」(千八百八十三年再版、レティフ・ド・ラ・ブレトンヌ著「ニコルス氏」)序に附加して置くが、デュウレンはレティフを「アルス・アマンデイに於ける大家」であると認めて、その意見から彼を「レティフ・ド・ラ・ブレトンヌ」の中で論じてゐる。

基督教に責任があるにしてもないにしても、兎に角、基督教國全體を通じて、單に戀情的のみならず道德的にも、性愛技巧の重大なことを認めるに大失敗をして来たことは疑ふことが出来ない。現在、吾々の周圍には性的啓蒙の大復活が起りつゝあるけれども、然し根本的に緊要な一事は性愛技巧の智識であるといふことさへ殆んど認められてゐない位である。現在理解されてゐる性的教育は、大抵、全然消極的のもので單なる「汝犯す勿れ」式の連續である。若しこの失敗が、性愛技巧は人相學的及び心理學的智識に基礎を置かなければならないから、講演にしたり書物にしたりすべく餘りに微妙であり複雑であり個人的であるといふ意識的な熟慮したる結果であるならば、それは理窟にもあつてゐるし、健全でもある。然し見たところ、それは然らず、全く無智か冷淡か、或はそれ以上に悪いものゝ結果であるらしく考へられる。

戀愛をすることは、他の技巧と同じく、半ば自然的の技巧、——「自然の作つた技巧」であるから、遊んでゐる内に學び行ふやうな自然物である。少年少女は冗談にも

眞面目にも、肉體的及び心理的に戀愛を行ふ傾向を持つてゐる。然しこの肉體的方面の遊びは發見された時、年長者から厳しく止められるけれど、心理的方面は笑はれるのである。

春機發動期が過ぎると、或方法で、性愛技巧が廣く經驗され實行されるやうになる。

それは男女間の「たはむれ」といふ方法で、特にイギリスとアメリカとに著しい。この「たはむれ」はその本來の表現に於て全く自然的である。これは動物にも見ることが出来て言はば單なる媚惑の初期であるが、現代の文明状態にあつてはこの「たはむれ」がその程度で止まつてゐないことが多いのである。文明の状態にあつては、結婚は困難なものとなり、戀愛やその契約は餘りに眞面目なので氣輕には出来ず、實際の性交を行へば、不評判な噂を立てられると同時に危険である。だからして、「たはむれ」が丁度かうした文明状態には適してゐる。元來は正式の媚惑の單なる初期の形式だつたものが段々發達して來て、性的満足をする一方法となつたのである。

媚惑の一部としてでなく、それ自身のために學ばれる、この「たはむれ」の墮落した方法のことを、フォレルは巧妙に寫してゐる。(「性の問題」に於て)即ち彼は「たはむれ」の定義を下してかう言つてゐる。「相手の性的本能を喚起するやうな性的本能の凡ての表現、然し常に交接を伴はないもの。」

「たはむれ」の最初に於ては、挑發的な視線を送つたり、無意識のやうに見せて相手の身體に觸るだけであるが、少し経つと、撫ぜたり、接吻したり、抱擁したり、時には機能亢進にまで進んだりする。かくして、フォレルの言ふところに依れば、肉感的な女子は舞踏中に、その衣服の接觸に依つて、相手に機能亢進を起さしめるのである。最初から最後まで、これには何等はつきりした説明や申込みや或は宣言等を要しないので、双方共に「たはむれ」に没頭する期間以上に何等の關係をも持續しない。けれども時に「たはむれ」は全く、戀情的な、又は下等な話頭に耽ることから掻き立てられる

ことがある。男子の方からでも女子の方からでも「たはむれ」を能動的に演ずることは出来るが、然し女子にあつては男子を不快に思はせたり、自らの評判を落したりしないで能動的に演ずるには、より以上の洗練と熟達とを必要とする。が、實を言へば男子も矢張り同様である。何故といふに、女子といふものは多くの場合「たはむれ」を好みながらも、大抵はより洗練された形式を選ぶものだから。

「たはむれ」には無数の種類があつて、而も媚惑の初期の一部分としては正當な位置と辯明とを持つてゐるけれど、フォレルは「目的がそれ自身にあり、そしてそれ自身を越えないのであるから、これは墮落した一現象である」と結論してゐる。

フランス風の意見に依つてベントソン夫人は「たはむれ」を概論してゐるが、然し彼女は、媚惑の中に含まれる「たはむれ」に自然的根據のあることを悟らなかつた。彼女はこれを「汝戀を弄ぶ勿れ」に反抗する罪惡であると認めてゐる。何故ならば、これは不可抗的な情熱の口實を持つてゐるべきであるから。然し彼女はアメリカに於ては、

その人民の氣質、教育、習慣の關係上、比較的複雑しないであられる（但し女子には矢張り不良な影響を與へるけれども）と考へてゐる。が、たはむれは一切の生氣ある活動に箇有の關係を有してゐること、たはむれの合理的批評は、その正しいか正しくないかよりも、正しく制限されてゐるかどうかを以てすべきである、といふことを記憶して置かなければならない。

自然な形式にある「たはむれ」は、戀人を吟味したり幾分か性愛技巧を得たりする方に似てゐて、健全な存在の理由を持つてゐるけれども、矢張りそれは性愛に對しては不適當な準備である。これは性愛に對する、又は單に性愛の肉體的行為に對する無智（これは「たはむれ」の流行する各國の男女に依つて屢々示される）に依つて充分に證明される。

單に性愛技巧に就いてのみでなく、性愛の肉體的事實に就いてさへ無智なことは、女子、殊に中流の女子には多く見られるが、男子にも往々にしてある。何故といふに

性心の理

文明人は、昔フリツシュが指摘したやうに性的生活の事實を屢々牛乳賣りの女よりも知らないものであるから。然し同じ無智にしても男子と女子とは、その現れ方に相違がある。

女子の性的無智は全く無邪氣なところから發して、密接した肉體上の關係が含まれてゐることを知らず、そのためにいろんな誤解を生ずるのである。關係といふのは相並んで横たはることと考へてゐる者もあり、性交は臍で行はれるものと考へてゐる者も多い。又性交は一夜中を要すると思つてゐる者も決して少くはない。

前章に於て、性的無智の一般的害悪を説く必要があつたが、此處では結婚の關係に關してその特殊の害悪を述べる必要がある。少女は、やがて結婚するだらうといふ漠然とした考を以て教育される。これは全く正しい、何故ならその少女たちは大抵結婚するのだから。然し、彼女等を一生の行路のために教へなければならぬといふ考は、その教師たちにまだ起らないのである。教師たちの頭は愚かしくも、どうでもいゝやう

性の愛の技巧

性心の理

な事實の智識のみを以て充たされてゐて、人生のために何よりも重大な教育は全然與へることが出来ないものである。女子はこの世の中の大抵の仕事を學ぶ。けれども妻たること、母たることの最高の天職に就いては一向學ぶことがないのである。

現代の不完全な女子教育は、その母がより良き何物かを要求しないのでゐる限り持續するだらう、といふ説は眞理である。又、母親自身が適宜にその娘に配分して、性的關係の智識に關して多くのことがあると言はれるのも、より以上の眞理である。そして更にかういふことも確實に言ふことが出来る。即ち、吾々が此處で特に係はつてゐる性愛技巧は實際の經驗に依つてのみ學ばるべきであると。然しこの實際の經驗は現代の社會状態にあつては、有徳の處女が信用を保持したままで得ることが困難である。女子は依然として不幸にも屢々最も悪い偏見や誤解を持つて結婚生活に入らなければならぬことがある。自分で一切のことを知つてゐると信じてゐる場合でさへ實は何も知らないことがある。又たとひ最良の準備が出来上つてゐたとしても、現代の狀態に

性愛の技巧

あつて、女子は不利な結婚をするものである。何故かといふに、女子は男子に比して性愛を十分に知るのが遅れ、隨つて、結婚前の性的生活の經驗は、大抵その夫よりも制限された種類のものである。(一)これ故最良の準備を以てしても、女子は結婚後數年を経なければ、自分自身の性的必要を明瞭に悟つたり、その必要を満足させて呉れる夫の能力をよく理解したりし得ないことが有りがちである。吾々は結婚のための完全な準備が個人的にも社會的にも必要であることを評價し過ぎることは出来ない。そして離婚の方法が困難であればある程、その準備が必要になつて來るのである。

(二)

(註一) ヒルスの言ふところに依れば、大都市に住居する元氣のいゝ性的解放をしてゐる青年は二十五歳に於て、既に二十五人、多きは五十人の女子と關係してゐる。然るに同年の教育ある女子は漸く性の興奮を感じ出したばかりであるといふ。

(註二) スミス・バアカはその「結婚者の厭忌」(千八百九十二年九月の「神經及び精神病雜誌所載」)の研究に於て、結婚前に適當な性的智識を持つてゐることは、さうした厭忌の危険を減する價值があると述べてゐる。

何人も恐らく女子が結婚するに際して極端に無智である多くの場合を熟知してゐるであらう。次の一例は結婚を望まれた二十七歳の女子で、稍極端論ではあるが、必ずしも珍しいといふ程のものではない。

「彼女は自分の愛情をはつきり感じなかつたので、戀愛の意味を従姉に尋ねて見た。従姉はエリス・エセルマアの『人間の花』を貸し與へた。彼女はこれを讀んで、男子が女子の肉體を欲してゐることを知つて喫驚してしまひ、全く數日間病床に就いた程であつた。その次に彼女を戀してゐる男が身體を撫ぜようとした時に、それは『淫慾』ですと彼女は言つた。その後、彼女はジョウジ・ムウアのシスタア・テレザを讀むに及んで、『女も男と同じやうに悪い』ことを知りひどく悲しくなつてしまつた」とい

ふことである。かうした研究を含めた「歴史」は、その附録中に、性的生活の最も中心的事實に就いての少女の悲しむべき無智を幾つとなく擧げてゐる。かうした事情の下にあつて、結婚が幻滅や嫌惡に終るといふことは當然のことである。

普通に言はれてゐる説に従ふと、結婚の特權と義務とは妻を教へ導くことは、夫に屬した義務であるといふ。然し、結婚の意味をよく知らない内に、自らを結婚するやうに強ひることが女子にとつて不當であるといふ問題は別にしても、女子にとつて夫から説明して貰ふことを豫期することは不合理であることを知るために、多くのことが必要であるといふことを言はなければならぬ。例へば交接に際して男子が女子に比して甚しく疲労する事實は明白なことであるが、經驗のない花嫁は豫め、彼女に異常な興奮を起させる頻繁な機能亢進が、夫には沈鬱的な影響を與へること、及び男子の誇りがその事實を隠さうとしてゐるといふことを知り得ないのである。花嫁はその無智のために、彼女の快感が夫の勞力に依つて購はれたものであることも、彼女にと

つて過剰でないものが夫にとつては頗る過剰であることを、意識してゐない。それを知つてゐる女子(例へば再婚した女子の如き)は、この點に於て夫の健康に注意し、彼女自身の慾望を制してゐる。何故なら男子は妻の慾望を充たし得ないと認めることを喜ばない事實がある。それを彼女はよく理解してゐるからである。(ヒルスは又、その「愛への道」に於て、女子が結婚前に男子の性的能力の自然的制限を知ることが如何に必要であるかを説いてゐる。

性愛技巧に關する凡てを女子が知らないこと、乃至、性的生活の自然的事實に對する準備を全然缺いてゐることが、若し夫の智識と熟練と思慮とに依つて常に償はれるものならば、その結婚の害は恐らく減じることであらう、然るにさうした場合は常ではない。多くは、殊にイギリスに於ては、大多數の男子の、女子に就いての結婚前の智識は大抵娼婦の範圍に限られてゐて、多くは女子との親しい交際を知らず、その性

的經驗と言つても手淫か「たはむれ」かの類を出てゐない。勿論感覺的な聰明な氣質の男子ならば、訓練が出来てゐるに係はらず、忍耐と思慮とを以て、性愛の道に横たはつてゐる凡ての困難に打ち勝つことが出来る。女子は屢々、その生活の性的方面を教へられる代りに、無智と偏見とを教へられるものだから、性愛の道にさうした困難が横たはるのである。然し男子が娼婦から受けた訓練と經驗とは、それを最も好都合に受けた場合でさへ、何等性的經驗のない、自分と同一階級にある女子に接近するための正しい準備となることは減多にない。その大抵の結果は、兩極端になりがちで、而もどちらも間違つてゐる。即ち第一、男子は花嫁を娼婦として扱ふか、それとも、彼女が直ちに自分の慣れてゐるやうな性交の形式に嵌まるべき初心者であるとして扱ふその結果は花嫁の不快を買ふといふ危険がある。第二、男子は花嫁の純潔と威厳とを顧慮し、自分が從來知つてゐる女とは全然別人種の取扱ひをして、極端な尊敬をするといふ、前の場合とは正反對の態度を採る。その結果は女子の性的慾望を起さし

たり、充たしたりするに失敗するのである。或通信員が自分の結婚に就いて書いてゐる。「最初の夜、彼女は私が直に能動的態度を採つたことに對して恐れ驚いた。吾々は結婚前から腹藏なく性に關して話してゐたが、私は彼女が性交の詳細を知らないであらうとは思つてゐなかつた。さうしたことを話すのは彼女に不快の念を興へるだらうと想像してゐたが、今になつて見ると、それは説明をして置くべきであつた。結婚前に、私は自分の妻に負ふ尊敬が、下品と思はれる如何なる話とも矛盾するものであると結論してゐたので、當時私が汚穢と認めることに彼女を服せしめるやうなことをすまい。裸體でゐたり、裸體にさせたりなどもすまいと決心してゐた。實際私は虚偽の謹慎に囚はれてゐたわけであるが、それは、私が結婚前に住んでゐた生活からの人爲的な反動であつた。今、それは私には自然であるやうに思へる、若し女を愛するならば自分にしようと思つたこと、彼女にしようと思つたことを何でもするがよい。若し私が吾々二人の間に行はれる、さうした行爲を悪いと感じなかつたならば、其處には性的同

情が樹立されてゐたのだ。その性的同情は私をして益々彼女に近く結合せしめるものであつたらう。」

而も、何等性的經驗なしに結婚する男子もあるが、勿論これも女子の場合以上に危険なものである。これは屢々肉體的にも精神的にも最良の男子であることがある。極めて才能のある、立派な教育を受けた男子が、實際的にも理論的にも、性的事實に關して如何に無智であるか、それは實に驚くべきものがある。

フロウドは言ふ。(千九百八年三月、「性的問題」に於て)「青年にあつて、青年期の絶對禁慾は、結婚のための最良の準備ではない。女子はこのことを知つてゐて、既に他の女と接して男子たるべきことを證明した求婚者を求めるものである。」ラウラ・マルホルムの作中に見える戀人は女主人公に言ふ。「私は嘗て女に手を觸れたことがありません」と。少女は「恐ろしさに男に背を向けてしまつた。そして彼女には冷たい顔へ

が身内を走つたやうに思はれた。ぞつとするやうな詐欺が。」とある。これと同じ感情は年の多い遊治郎に對する十八歳から二十四歳までの強い女に依つて屢々經驗される情熱の裡に、誇張した形式で現れてゐる。(これはフオレルの「性的問題」中に論じられてゐる。)

女子が、他の女を征服した男子を選択するのは、他にも理由がある。ヴァレラの言ふところに依れば(「ドナ・ルズ」二百五頁最も宗教的な道徳的な女性でさへも、多くの女性に戀した男子と結婚するのを好むものである。何故ならばそれは男子がその女性を選んだことにより大なる價値を與へるから。(即ち今までの女より以上にその女性を認めたことになるから。))同時に、それは女子に、その男子をより高い理想にまで變ずる機會を與へるから。疑ひもなく、無經驗の男子が、同じく無經驗な女子と結婚した場合、彼等は各自に自らを適應せしめて、永久に琴瑟相和することもある。然し常にさうでは決してない。若し妻が本能或は經驗に依つて教へられてゐれば、彼女は兎角

夫が性愛技巧に於て臆病であり無力であるのを残念に思ひがちである。又同じく無智であるとしても、無智な夫は夫婦間の義務であると考へるところのものを實行することに於て、思ひ切つて亂暴なために、彼女は永久に壓迫され、そして次第に生殖不能といふ状態に陥るのである。實際、時に依ると、恐るべき肉體的障害が夫のかうした無智のために新婦に課せられることが多い。

或通信員は言ふ「私は大抵の男子は結婚前に性的關係の經驗を持つてゐると思ふ。けれども少くとも此處に一人の例外を知つてゐる。彼は二十歳になるまで女性的事實の極めて初歩の考さへ持つてゐなかつた。二十九歳の時、丁度その結婚前數ヶ月の前だつたが、彼は私を訪問し、男女關係のことを質問して、その無智を暴露した。私は、他の點では聰明なこの人間が、そんな無智であらうとは如何にしても信じてゐることが出来なかつた。彼は動物の持つてゐるやうな、彼を誘惑するところの本能を明らかに持つてゐなかつた。その理性は、その必要な智識を與へ得なかつたのだ。いづれにして

性心の理

も彼がこの本能的とも言ふべき智識を缺いてゐたことは頗る興味ある事實である。私は今一人、殆んど同程度に無智な男子を知つてゐるが、これも私を訪問して、夫婦間の義務に就いての助言を求めた。而もこの二人は共に手淫をしてゐて且つ情熱的だつた。」

かうした例は必ずしも珍しくはない、然し多くの場合は不充分ではあるが、何處からか智識を得てゐるもので、無智なのは部分的に過ぎない。但し矢張りそれでも危険は危険である。

バルザックは通常の夫を、ヴァイオリンを弾かうとする狸々に比してゐる。

「吾々が本能的に感じる通り、愛は最も調和したる韻律である。女性は快樂の微妙なる機械である。然し、その顫へる絃を知り、その音階や、短急自在の指の動きを學ぶ必要がある。然るに如何に多くの狸々が、——男子のことを意味する、——女性とは如何なるものかを知らないで結婚することだらう！……殆んど凡ての男子は、女性及

性の技巧

び戀愛に關して全然無智でありながら結婚するのだ。」(バルザック「結婚の生理學」、冥想七)

ニウデバウエルは(分晩前一ヶ月間)千八百八十九年版、九卷、二百二十一頁(陰莖に依つて關係中行はれた傷害の例を百五十例集めてゐる。その原因は、暴行、一方或は双方の泥酔、交接の變則なる位置、男女生殖器の不平衡、女子生殖器の疾病等である。(アール・ダウルユウ・テイラア、「生殖器病の實際的治療法」第三十五章對照)ブルムライヒも亦亂暴な交接に依つて醸される傷害を論じてゐる。(セネエタア及びカミナア、「結婚關係に於ける健康と疾病」第二卷、七百七十頁——七百七十九頁)シイ・エムグリーンは(千八百九十三年四月十三日、「ポストン醫學外科誌」)新婚の貴婦人が交接に依つて膈を破裂されたといふ二例を述べてゐる。診察したところ、これには別に非常に暴行の證據は見られなかつたといふ。ミロットは(千八百九十九年九月十六日「英國醫學誌」)新婚の夜に生じた同様の患者を記録してゐる。交接中に集中された力のた

めに、それが尿道で行はれるといふやうな場合もある。

ユウレンスルビは、「性的神経病」(六十九頁)腫の痙攣を起したり交接しようとするば烈しい苦痛を覚えたりする疾病、ヴァチニスムスは最初の交接が亂暴で而も不熟練であるために生じると言つてゐる。アドレルも同じく「妻の不完全なる性交」(百六十頁)處女膜に傷痕が残るのと、烈しい最初の交接の苦しい記憶とが、ヴァチニスムスの原因となることが多いと信じてゐる。

然しながら、結婚初期に於ける亂暴な交接に依つて生じた肉體的傷害或は疾病的状態の特殊な場合は、性愛技巧に關する一般的無智の惡結果を證する證據の、極めて一部分をなすに過ぎないのである。ドイツに就いて言へばフェウルプリンゲルは書いてゐる。(セネエタア及びカミナア、「結婚關係に於ける健康と疾病」第一卷、二百十五頁)「私は、その最初の性交の持續する苦痛の記憶を持つてゐる既婚婦人の數が、敢て醫師の相談を求める婦人の數よりも遙かに多いのを見て、非常に満足するものであ

る。」

イギリスに就いて言へば、次の經驗が語られてゐる。——一貴婦人が同一日に、六人の既婚婦人に新婚の經驗に關してひそかに質問した。六人の凡てにとつて性交は打撃を與へてゐた。その内、二人は全然性交のことを知らず、他の四人は性交の如何なるものかは知つてゐながら、矢張り驚いたといふことである。而もこれ等の婦人は中流階級に屬する者で、十人並以上の智力を有し、且つ一人は醫師であつた。

ブレウエル及びフレウドは「ヒステリーの研究」(二百十六頁)新婚の夜は實際に於て屢々強姦であること、そのために時としてはヒステリーの生ずること、而も、そのヒステリーは満足する性的關係が確立するまでは治癒しないこと、を指摘してゐる。キツシュは、「女性の性的生活」(第二篇)亂暴な交接を行はない場合でも、不器用な不經驗な交接は妻の不完全な興奮を生じて、性的不満症の主要な原因となることを主張する。但しこの性的不満症は男女生殖器の均衡、乃至一方の疾病に依つても生ずるもの

である。キツシユは附加して言ふ、——性的不満症の驚くべき程に多いことは事實であるが、時として女子は正當の理由なくして、自らを結婚の犠牲になつたものとして他人の同情を惹くために、さうした不平を洩らすこともある。その常にある徴候は女子の側に於ける射精の缺乏である。又、キツシユは、新婚の夜に處女を蹂躪することとは屢々實際の強姦であると言ふ。一例として彼は知人の若い花嫁を擧げてゐるが、この花嫁は、その夜逃げ去つてしまつて、どんなに説いても夫の家に歸るのを聞かなかつた程に、性愛の肉體的方面の事を知らず、随つて夫の最初の性交の試みに對して恐怖したのである。かゝる事情の下にあつて、宗教上の法規に依つて、教會は、その結婚を無効のものとなし得た、といふことは此處に記して置く價值がある。トマス・スラタアの「道徳的神學」第二卷三百十八頁を見よ。更にキツシユは、新婚旅行は失敗であると考へてゐる。疲勞、興奮、長い旅程、觀光、虚偽の謹慎、悪旅館の設備、さうしたもの新婦に悪影響を與へて、恐るべき疾病の原因となることが度々あるといふ。

これは確かにさうであると考へられる。

處女蹂躪の行爲が極端に精神的に影響したことを、アドレルは強く力説してゐる。彼はこれを永久の性的麻痺の主要なる原因と認めてゐる。

「この最初の瞬間、即ち男子がその充分の權利を得る瞬間が、屢々一生を決定してしまふのである。その時、拙劣な、興奮し過ぎた男子は、女子の無感覺の種子を蒔く。そして持續されるその不器用と粗野との交接が、それを永久の性的麻痺にまで導いてしまふ。向う見ずの亂暴な陽性の力を持った男子は、單に女子に不安と苦痛とを與へるのみで、而もそれを反覆すれば、女子の嫌惡を助長するのみである。……男子の犠牲となつてゐる冷淡な女子の大部分は、その女子に對する男子の無意識的な拙劣か、又は意識的の亂暴かである。即ちその男子は、特殊な性愛技巧を以て育まなければならぬ柔らかな植物を折り、その發達の光輝を奪つてしまつたのである、その全生涯を通じて黙りがちな顛へてゐる彼女は、亂暴な新婚の夜の記憶を忘れないであらう。そして

夫が妻の愛の慾望に自らを適應することなく自らのみの慾望を充たさうと求める時には、常に彼は拒絶するに至るであらう。(アドレル、「女子の不完全なる性交」百五十九頁)

性心の埋
「私は夫の接近するのを恐れて身震ひする正直な婦人を知つてゐる」と、昔デイドロオはその論文「女性論」の中に書いてゐる。「私は彼女が急いで浴槽に飛び込んだのを見た。そして彼女は、決して義務の汚點が充分に洗へないと感じたのだ。」女子に「結婚の義務」の虚偽の思想を教へ、そしてその夫に性愛技巧を教へないで置くやうな道徳、さうした有害な組織の下に生れて、その犠牲となつてゐる大多数の婦人に、この例は當嵌まるものである。

女子は、その立派な自然的本能が、その謹慎振りと偏見(この二つは彼女たちを克明にも捕へてしまふことが屢々あるけれど)とに依つて絶望的に、一變せられない限

性愛の技巧

り、男子よりも確實に性愛技巧を理解するものである。子供の域を漸く脱したばかりの時に、既に彼女等は自分に與へられた役割を完全に悟ることがある。この文明の狀態にあつて、性愛技巧は、男子の場合よりも、女子の場合に於て、自然が作つたところの技巧である。モンティヌが古く言つてゐる如く、彼女等は男子が教へ得る以上のものを性愛に就いて知つてゐる。何故ならば、それは彼女等の血液中に生れた紀律であるから。(一)

(一) モンティヌ、「論文集」第三卷第五章。女子が、その無智であり無經驗であるに係はらず、屢々男子よりも結婚に關して、より良く準備してゐる事實は意義のあることである。女子は普通男子よりも結婚に際して謹慎であるけれど、而も「彼女は概して、驚くべき告白を持つてゐることが稀であるに係はらず、結婚生活に屬する事柄を相手よりも良く知つてゐるのである。」このことをフェルブリングルが注意してゐる。

(セネエタア及びカミナア、「結婚關係に於ける健康と疾病」第一卷二百十二頁)

性の心理

サンフォード・ベルの廣汎な調査に依れば、性愛の情緒は早くも三歳にして現れ得るといふ。更に記憶して置かなければならないが、少女は、肉體的にも精神的にも、同年の少年以上に早熟である。(例へばハヴェロツク・エリス、「男性と女性」第四版、三十四頁以下、二百頁等参照)かくして女子は春機發動期に達すれば、小性愛技巧を完全に知つて來るのである。春機發動期が戀愛の年齢であることは廣く一般に認められてゐるらしく思へる。

この、少女の性的早熟といふことは、「許諾年齢」即ち、女子が性交を承諾すれば法律を以て罰せられる年齢の問題に重大な關係を持つてゐる。過去二十五年前までは、男子がそれ以上の年齢になればその少女と性交を犯しても罪にならないといふ、その少女の年齢を、極めて低く規定する傾向があり、甚だしきは十歳であつた。然るに最近に至ると、その反對に、極めて高きに失する傾向がある。イギリスに於ては、千八

性の愛技巧

百八十五年の刑法改正法令に依つて、その許諾年齢を十六歳に引上げた。(この法令は百八票の多數にて衆議院を通過したのである)この十六歳といふのは、温帶國に於て制限すべき、正當な年齢で、これ以上に引上げてはならない年齢である。これはイタリイの刑法に依つて、又文明諸國の多くに於ても認められる年齢である。然しながらグラツドストンは十八歳に引上げようとし、又ホワアドは、この問題を合衆國に就いて論じた中で、次のやうに言つてゐる。(「結婚制度」第三卷、百九十五頁—二百三頁)「許諾年齢は二十一歳にまで引上げべきである。そして婦人が職業或は政治的關係に入り得る法律上の成年と一致させるべきである。」と。

最近アメリカの各國では、この問題に關して非常に差異ある制限が規定された。甚だしいのは八歳といふのがあり、反對に十八歳以下の少女と交接したる者は、「強姦罪」と認めて獄に投ずべし、といふのもある。

が、かうした法令は、專斷であり人爲的であり不自然であると認めなければならな

い。それ等は生物學的根據に立たず、社會の常識に依つて勵行され得ないのである。智力の抽象的事物を理解する能力に關して規定した法律上の成年と、性的成熟の年齢との間に些の類似は存してゐないのである。何故ならば、性的成熟の年齢は、肉體的にも精神的にも、より早く起り、且つ、女子にあつては確たる生物學的事件、即ち月經の初潮に於ける春機發動期の完成といふことに依つて決定されるからである。世界各國に於ける自然の狀態下に生活してゐる人々の間では、少女は春機發動期に於て性的に一人前の女子になると認められてゐる。少女はその期に成身して妻となり母となるのである。人類一般の自然的本能に依つて、女子の義務の凡てに堪へ得る程度に成長したと認められるところの女子と性交を行ふことが、強姦罪であり、獄に投すべきであるといふ宣告は、たとへ吾々が心理的及び道德的考察の凡てを問題外にしても、言葉汚すものであり、更に法律を汚すものである。

この問題に於ての健全な意見は、たしかに、男子が少女に近附いて罪惡となる標準

を構成するのは、その少女の春機發動期であるといふ意見である。ヨオロッパ及び北アメリカの温帯國內に於ては、月經初潮の平均年齢が、即ち完全な春機發動期が、十五歳である。(例へばハヴェロツク・エリス、「男性と女性」十一章を見よ。この事實は千九百九年版キツシュの「女子の性的生活」中には詳細に説かれてゐる。)それ故、成身したる男子が、十六歳未満の少女と、その和合であると否とを問はず、性的關係を結ぶことは、たしかに犯罪行爲であり罰せらるべきである。然し月經初潮の年齢がそれよりも高かつたり低かつたりする地方では、それぞれに許諾年齢をも變へなければならぬ。

若し吾々の意見に心理學的考察、道德、法律を取り入れるならば、吾々は吾々の意見に對する有り餘る辯明を見出すのである。少女が、普通の學生生活を送る數年を通じて、同年の少年よりも、肉體的並びに精神的に常に進歩してゐることを、吾々は記憶しなければならぬ。そして又吾々は、この早熟が少女の性的發達を蔽つてゐる事

實を認めなければならぬ。概して女子には稍々後年にならなければ實際的性慾が生じないといふことは事實である。けれどもトマス・ヘアデイ氏の觀察も亦眞理である。「蜘蛛は常に男子であり蠅は常に女子であることは決して吾々を驚かさぬ。」(千八百九十四年七月の「新評論」)それ故に、たとへ一少女と稍々年長の青年との間に性交が行はれても、少女の方が、より成熟し、より落着き、より兩者の責任を持ち、更に場合に依れば、より性交の初期に於て能動的である。(このことは此「研究」第三卷に論じてゐる)

又、少女が一度成熟して、その肉體的發達と同様に態度や習慣の凡てを知つた時、最早男子はその年齢を判斷することの出来ないものである。少女が成熟の年齢に達してゐないことを見るのは容易である。けれども成熟した女子が果して十八歳以上であるか以下であるかを見るのは不可能である。随つて少くとも、その相手たる男子の運命を、自然に根據を持たない差別の認識に置くことは不當である。

附け加へて言つて置く必要があるが、この根據に立つた許諾年齢の制定は、決して十六歳を少しばかり越した少女との性交を奨励するといふ意味ではなく、又社會的に若しくは道徳的に許すといふ意味でもない。然し、此處で吾々は法律の世界にゐるのではない。女子が自らを沈黙の裡に保持するといふことは、文明状態にある上流の少女の自然的傾向である。そして、その傾向を維持し助長するところの壓迫は、彼女が婚期に際した時、その環境に依つて、先づ第一に彼女自身の智的反省に依つて補はれなければならぬ。成熟期を長く過して來た若い婦人の裡に、彼女は自らの心身の守護する責任を持つてゐないといふ考を養成することは、近代の感情と調和しないことである。許諾年齢を高く制限して來た國家は、實にそのために、その國家がより正しい方法に依つて端正な道徳的標準を支持し得る能力を持つてゐないことの卑しい告白をしてゐるのである。それは警告としては有効であるが、軌範としての價値はない。

然し女子の智識は男子の無智の代りとなることは出来ない。反對に單にそれを顯はすに役立つのみである。何故といふに性愛の技巧に於ては必ず男子がその先導をしなければならぬからである。女子が胸に抱いてゐる親密と大膽との秘密を先づ開かなければならぬ者は男子である。輕蔑或は不快の念の影を以て接するのは實に危険で、相手の女は、それが妻であつても、自ら先導者であることを示さぬ男子に對しては戀の秘密を開かないのである。(一)世には自分の妻が時としては沈黙の恨みを抱いてゐる事實を全然知らない呑氣にも満足した夫がある。妻が探ることを要求もされず受けることを強ひられもしない微妙な秘密と特權とがあるといふ感情は、屢々、性的の意味に於て、妻をして、自らが失敗してゐることを悟らない夫から離れしめるものである。(二)かかる夫の行爲は、それが多くの場合、彼等が教へられて來た道德の結果であるから實に厄介である。彼等は少年時代から、毅然たるべく、男性的たるべく、高潔心を保つべく、そして、女子に氣を留むべからず、性的放縱に對する慾望を思ふべ

からず、といふ風に教育せられて來た。彼等はあらゆる方面に於て、女子に接近するのは唯結婚に於てのみ正しく且つ安全でさへあると説かれて來た。彼等は、性的放縱乃至それに屬する凡ては下劣なる墮落したる或物で、最も悪ければ單なる自然の必要、最も良ければ名譽ある直截な態度の内に完成さるべき義務である、といふ觀念を得て來た何人も、愛は藝術である、奥に女性の魂と肉體とを所有することは、男性の最上の熟練と洞察とを要する仕事である、といふことを説いた者はないらしく思へる。男子がその教練を學ぶことが遅きに失すると、彼は兎角、その似而非道德のために、彼の生活及妻の生活を破壊する傾向を持つのである。その或場合には、夫、或は妻、或は兩者共に、遂に第三者に惹かれてその結果は離婚となり、そして彼等はより幸福なる保護の下に、より良き經驗を以て新たな出發を開始するに至るのである。

性愛技巧に關する一般的無智は、この問題に就いて最も屢々反問される「性交の度數如何」といふ淺薄な質問であるといふ事實に依つて推測することが出来る。更にこ

の質問は太古から宗教の創始者、立法家、人類の哲學者等を占めてゐるのである。(三)ゾロアスタアは、九日間に一回たるべしと言つた。マネスの法律は一月の内十四日間の關係を許したが、有名な古代印度の醫師サスルタは、一ヶ月六回、但し炎暑の夏は一ヶ月一回と規定し、更に同じく印度の權威者は一ヶ月三四回と言つてゐる。ソロンの市民法では一ヶ月三回として、ゾロアスタアの説に一致してゐる。

モハメツト教では法典に於て、關係は一週一回たるべしと命ぜられる。猶太の律法は更に詳細の規定を發し、交接を人民の階級に依つて差異あるものとしてゐる。即ち、壯健な青年は、而も勞働を強ひられない青年に限り一日に一回、通常人は一週に二回教育ある人間は一週に一回とする。ルウテルは一週二回が最適であると考へた。

この度数を見ると、恐らく性的衝動と刺戟とが少かつたであらうと思はれる。古代に於ては、比較的長い間隔を置き、近代文明に近づくに伴つて度数の頻繁になる傾向のあることが解る。そして變化も狭い範圍内にあるが、それは恐らくこれ等の立法者

が凡て男子であるといふ事實に基くのであらう。女子の立法者であつたならば、必ずより以上に變化の傾向を示したに相違ない。何故なら性的衝動の變化は女子に於て男子よりも大であるから。かくしてゼノアは、前月に妊娠が生じてゐない限り、月に一度夫の接近するのを要求したが、反對に或女王、即ちアラゴンの女王は、熟慮した結果、正式の結婚に於ては月六回が適當なる規定たるべしと命じてゐる。(四)

(註一)「彼女は彼女の自尊をも彼女に對する私の尊敬をも失はない、」と或人が手紙に書いてゐる。「その理由は單に吾々二人が狂熱的に愛し合つてゐるから、そして、吾々のするあらゆる事は(その中には最も下等な娼婦でさへすることを拒むやうな行ひもあるけれど)單に吾々の情熱を行爲に移すだけの試みと思はれるのだからである。私は戀人同志にとつては如何なる物も非禮ではないといふことを以前には悟つてゐなかつたさうだ、私は常に感じる、彼女を愛することは自由教育であると。」これ明らか

に純潔な女性をして情熱的にせしめ得る唯一の態度である。

(註二) ラフォード・バイクは巧妙に言つてゐる。「彼女の好むところを言ふやうに、彼女の思ひをその自由な表現を以て述べるやうに、彼女を苦しめ壓する因襲を除外するやうに、彼女が充分打ち解けて語り得る者を持たせるやうに、而も彼女の語る一語でも誤解されないことを知るやうに、眞に理解してゐること、——これはあらゆる女性にとつて如何に嬉しいことであらう。而もこれを女性に與へ得る男性が如何に乏しいことであらう！」

(註三) 稍々最近にあつては、これは夢精の度数に關聯して論じられてゐる。

(註四) ゼノビアの實行はギボン「衰亡史」二卷三百二頁に説かれてゐる。アラゴン女王のことは法學者ニコラス・ボイエルが「判決中」に書いてゐる。

性交の適當な度数の見積りは常に、月經時の中止といふことを含んでゐる。これは

教養の乏しい古代に於て殊に著しかつた。當時に於ては性交は普通危險或は罪惡、或は兩者を兼ねてゐるものと考へられてゐた。文明状態に於ては、その禁止の理由が審美的根據に基いてゐて、妻は、たとへ慾望が生じて、月經中、自ら「汚れてゐる」と認めてゐる場合に、夫に接しられることに不快を覺える。そして夫も容易にこの態度を了解するのである。然しこの審美的障害は主として、今日尙一般に感じられてゐる、經水の迷信的恐怖の結果であつて、若し更に工夫して清潔にすれば或程度まで除けるのである。

月經中に性交を禁止することは立派な一般の規律となつてゐるが、或場合には、これを破つて差支へない理由を持つてゐる。それはこの時に特別に性的慾望が強烈であるか、或は他の場合交接が肉體的に不可能であるが月經中は局部の弛緩に依つて可能である、といふ場合である。同時に記憶して置かなければならぬが、經水が閉止し始めた時は、一ケ月中の如何なる時よりも、恐らく、生物學的に言つて性交に最適の

時である。何故ならば、その時は單に交接が最も容易であり女子にとつては最も快感があるのみでなく、又妊娠し得る最も好機會を與へるからである。

シュリツヒは月經中に於て交接が最も容易であることを示して例證を擧げてゐる。

〔バルセノロヂア「三百二頁以下」カソリック派の神學者たちの或者は（サンシエズの如き、又後になつてはリグオリの如き）一般の意見を斥けて月經中の性交を許してゐる。但し、初期の神學者はそれを道德的罪惡であると認めてゐる。コツスマンは（セネター及びカミナアの「結婚關係に於ける健康と疾病」一巻二百四十九頁）月經の終りの交接を辯護するのみならず、その期の後半は差支へなしと言つてゐる。それは多くは女子がそれを必要とする時であり且つ自然の要求に壓迫されて女子は屢々その期間中著しく不機嫌になつてゐるからである。』結婚の水平線上に最初の雲が現れるのは殆んど常に月經中のことである。』

性の心理

性の愛の技巧

近代に於てこの問題に關して何等かの意見を述べた生理學者乃至醫學者は、多くルウテルの所説に近い。ハラアは、交接は一週二回以上に互るべからずと言ひ、（一）アクトンは一週一回、ハムモンドは二十五歳より四十歳に至る健全なる者さへ一週二回と言ふ（二）。フェウルプリンデルは一ヶ年五十回より百回と言つてこの見積りより少し過剰に見積つてゐる（三）。フォレルは壯年期の男子は一週二三回を適度とするも、或種の健康者には一ヶ月一回でも過剰である場合のあることを附記してゐる（四）。マシテガツザも同じく、その「性愛の衛生」に於て、二十歳以上三十歳の男子は一週二三回、三十歳以上四十歳までの男子は一週二回と述べてゐる。グヨオは各三日置きの性交を奨めてゐる。（五）

然しながら、交接の度数に關して如何なる一般的法則をも與へる必要はないと思はれる。個人的慾望と個人的性癖とは、健康の範囲内にあつては甚しく相違するのである。主として重要な問題は過剰に陥らないやうに注意することである。習慣的に過剰

の入口に入らうとするのをも注意しなければならぬ。多くの權威者は餘りに規定するのは警告にならないことを指摘してゐる。かくしてエルプは、ルウテルの意見が極少を現してゐると述べて、咎めらるゝことなくその限度を超過し得ることを附加した。そして彼はさうした變化は人間の生來であると考へてゐる。(六)又リピングは大體ルウテルに賛意を表して置きながら、万人に法則を下す試みに反對し、各自が欲するままに行ふことが、悪い結果を生じない限り、最も安全な法則であると述べてゐる。(七)

(註一) ハラア「基本的生理學」千七百七十八年版、七卷、五十七頁。

(註二) ハムモンド「性的不能」百二十九頁。

(註三) フヒウルプリンゲル。セネクエア及びカミナア、「結婚關係に於ける健康と疾病」一巻、二百二十一頁。

(註四) フォレル、「性的問題」八十頁。

(註五) グヨオ、「性的經驗の日課」百四十四頁。

(註六) エルプ、ジイムセンの「手記」百四十八頁。グツトサイトも同じく極めて廣汎な變化が生來であり自然であると考へた。又、或人は民族的に變化があると信じてゐる。即ちイギリス人の生殖力は弱く、フランス人のそれは強いと。一方、ルウウンフェルドは、ドイツ民族がフランス民族よりも性交を反覆する癖を持つてゐることを述べてゐる。然しかかる意見は大した意義はないでせう、主たる差異は矢張り民族にはなくして個人にあるのだから。

(註七) リピング、「性的衛生」七十五頁。キツシユも「女子の性的生活」中に同意見を述べてゐる。

交接過度より生ずる害が女子に於て稀であるといふことは一般に承認せられてゐるらしく思へる。(例へばハムモンド、「性的不能」百二十七頁)然し稀には女子に害の

ある場合もある。(三人の妻を持つたが、その悉くが結婚後狂氣したといふ履歴を持つ男の記録にある。千八百七十九年一月「心理學雜誌」六百十一頁) 交接過度の場合には肉體的疲勞が混亂と幻想とを伴つて生ずる。ハッチンソンは一時的盲目を惹起した三例を擧げてゐる、これは凡て男子で、結婚後の交接過度が原因である。(千八百九十三年一月、「外科醫の記録」) この老醫家は交接過度より生ずる多くの例證を示してゐる。シュリツヒは(千七百二十年、「精液學」二百六十頁以下) 狂氣、卒中、假死、記憶喪失、盲目、禿頭、部分的發汗、痛風、死等が、この結果から生じたと述べてゐる。

然し逸することの出来ない考察が此處に残つてゐる。——交接の度数の見積りは、夫の假定されたる生理的必要に適するやうに作られたもので、それは恰も腸や膀胱の排絶を問題にする場合と同じ排他的精神を以て作られるのである。然るに性的必要は兩者即ち夫と妻との必要である。故に夫のみの必要を確めるのは充分であると言へな

い、同時に妻の必要を確める必要がある。その結果は二つの必要の調和でなければならぬ。

性 愛 の 技 巧

性的能力に於ける變化の廣い限度を、その變化がいつれの方面にあつても健全であり正則であるといふ事實と共に記憶して置くことは大切である。但しその變化が極端になれば勿論病理學的の意義を生じて來るのである。例へば或場合には、一男子は一ヶ月に一回の性交を持つて満足する、彼は夢精もなく、その間際中何等強い慾望をも感じない。然もこの男は怠惰な贅澤な生活をしてゐて、何等道徳的又は宗教的の躊躇に依つて制せられてゐるのではない。が、自分に適する以上の關係を、つまり月一回以上の關係をすれば平生消化機關を除けば頗る健康であるに健康を害してしまふのである。これと反對の一例は、四十五歳と五十歳との相愛の夫婦で、彼等は、月經中と分娩期(これは一度しかかつた)とを除き、二十年間毎夜の關係があつた。而も共に

氣持のいゝ、多感な、教育のある、つつまじやかな生活を受する人々であつた。そして彼等はその愛情と誠實とを、この性交頻繁の内に示したのである、娘が唯一人あつて、これは見かけは丈夫さうであつたが強壯ではなかつた。

或特殊の場合には狂熱的に、相愛する人々にとつて、數時間内に幾度も關係を反覆すること、或は異常な機能亢進を覺えることが有り得る。これは通常親和の初期、或は長い別居の後に於て生ずる。かくして或新婚の女子は一夜に十四回の亢進を覺え、その夫は七回を経験した。又、貞肅な生活をしてゐた或女子が遂に性的關係を始めると、對者の三回に對して十四五回の亢進を覺えた。更に、これは信すべき根據を持つてゐるが、非常に性的慾望の烈しい、少し異常な氣質を持つた或若い妻は、夫と一ヶ月間別居した後、一時間十五分内に二十六回の機能亢進を覺えたと言ふ。その夫は稍々年長であつたがその間に二回のみであつた。妻はその後で「全く破滅してしまつた」と述べてゐる。然しこれを信ずるとしても、この機能亢進が強烈なものでなかつ

.....

性の心理

性的行爲が短時間内に頻繁に行はれる時、その夫は妻と歩調を一つにして行き得ることは殆んどないのである。女子の性的能力は男子のそれよりも遅れて且つ困難を伴つて生ずるけれど、一旦生じたならば瞬間的に増大するといふことは眞理である。男子は、その精力が容易に生ずるけれども、又容易に疲労するのである。女子は屢々最初の機能亢進が終らなければ精力を得ないことがある。夫に完全な満足を與へる交接が、單に妻の熱意を動かす程度にしか役立たないといふことは、時として、幸福な結婚をした若い夫の不思議とするところである。極めて多くの女子が、繼續して數回行ふことが必要であると感ずる。彼女等の言葉に従へば、「組織を清める」ために必要なので、それは眠氣と疲労とを生ずるところか、光明と生氣とを女子に與へるのである。

性の愛の技巧

貞節の生活をして來た若い強壯な女子は性的關係を始めた時に、數人の夫が必要であるやうに又少くとも一日に一回の性交が必要であるやうに感ずる場合がある。尤も彼女は後に結婚生活に慣れて來ると、彼女の慾望が異常に過剰ではないと結論するに至る。夫は、若し性的能力を持つてゐるならばその力で、若し持つてゐないならばその熟練の思慮とで、妻の要求に自らを適合せしめなければならぬ。自分自身に何等の害をも及ぼすことなく女子を満足せしめ得る生來の能力を所有してゐる者は稀であるが、ベネディクト教授は、かかる男子のことを、「性的力士」と稱してゐる。而も教授は、かかる人間は容易に女子を支配すると言つてゐる。彼はカサノヴァを性的角力の典型であると認める。ネツケは性的角力と認める一男子のことを報告してゐるが、この男は、一生を通じて妻と、若し妻が好まない時は他の女と、一日に二回づつ交接を持續して七十五歳の時に遂に狂氣した。然しこの例は性的角力の場合と認めるよりも寧ろ性的過敏の場合と認めるべきであらう。

此處に於て吾々は性愛技巧の根本的要素に達する。吾々は基督教國に廣く流布して因襲となつた多くの道德的實行と道德的理論とを見て來た。それは尙現在も吾々の間に在つて根本的に性愛の技巧と相容れないものである。その思想は「結婚の義務」に就いて發達した。夫は、妻の希望が如何にあらうとも性交を行ふ權利と義務とを持つてゐる。妻は、かかる性交に服従すべき義務と權利（女子の場合には通常義務が先に述べられる）とを持つてゐる。而もその性交といふものは彼女が屢々下劣なる單に肉體的なる或物として教へられたもの、且つ出來る限り早く忘れ去るのが好いところの不快な殆んど墮落したる必要である。かかる態度で結婚に向ふことが、結婚の不幸殊に妻の不幸を醸すのは當然である。少しも怪しむに足りない。それは不義と離婚とを助長する。若しさうでなかつたら、それこそ驚くべきである。(一)

性愛の技巧は媚惑の根本的自然的事實に基く。そして媚惑とは、男子が女子に容れ

られやうとする努力である。有名なワツヤヤナは言ふ。「性愛技巧は女子を喜ばす技巧である」と。バルザックはその「結婚の生理學」中に言ふ。「男子はまづ女子の慾望を起すべき熟練を持つてゐない場合、妻との間に自らの快樂を許すべからず。」性愛技巧の全部は其處にある。女子は自然的に又本能的に、自らを男子に對して好ましく見せようとする。それは全然無關心な男子に對してさへさうである。そして戀に落ちた女子は自らを個人的に男子が喜ぶやうな形に作らうとする。肉體的戀愛が始まつた時、女子は生理學的に、表面上は男子よりも受動的である。(二)結局女子は肉體的方面に於ては戀愛の器械であり、その音樂を聞くものは男子の手であり男子の會釋でなければならぬ。

然し性愛技巧を説いて、精神的方面を肉體的方面から全部切り離すことは不可能である。さうしようと試みることは實に致命的な誤謬である。性的關係の肉體的方面を感知し得るのみの人間は、ヒントンが屢々言つた如く、ベエトオヴェンのヴァイオリ

ンのソナタを聴きながら、馬の尾が羊腸の上を走つてゐるといふ物質的事實のみに留意する底の人間である。

(註一) 「夫妻」と題するラフオウド・バイクの優れた論文中に(千九百二年「コスモポリタン」)かう書かれてゐる。「幸福ならぬ多くの結婚に於て、より多く失望する者は夫にあらずして妻である。」

(註二) 然し時として女子が比較的能動者となり得ることは、戀愛文學作家のよく認めてゐる事實である。ワツヤヤナは、時に女子が男子の位置を採り、髪の花飾りと溜息に交つた微笑と、垂れた顔とを以て、男子を愛撫し、その胸を押し當てて、「あなたは私に征服された者よ。あなたに憐れみの叫びを擧げさせるのは私の番よ。」と言ふことを書いてゐる。

性の心理

性の技巧

樂器の面影は常に性愛技巧の作者たちに繰り返されてゐる。バルザックが、不熟練な夫を例へて、ヴァイオリンを弾かうと試みる狸々であると言つたことは既に述べた。ジュル・ギュヨ博士は、その眞面目な尊敬すべき小著に於て同様の比較を試みてゐる。

「世には神から自らに與へられた樂器の研究に努力せず、又、その最も妙音を奏するために、その研究が必要であることを知らない者さへある。……あらゆる直接の接觸あらゆる性交の際の試みは(女子の器官が眼覺めてゐない場合)苦痛の感覺を、本能的の反感を、不快と嫌惡との感情を醸すものである。この事實に無智な男子は何人であらうとも、滑稽であり卑しむべきである。反對に、この事實を知りながら、敢て無視する男子、乃至夫は、何人であらうとも、暴行を働くものである。……男女の究局結合に於て、夫は教導しなければならず。又夫婦關係を持たなければならぬ。彼は恰も、その手に依り、或はその弓に依り、樂音或は騒音を出すところの樂人である。この

見地から見て、女子は全く、その巧妙に扱はれるか、拙劣に扱はれるかに従つて、調和した音色を出したり不調和の音色を出したりする多絃の樂器である。(ギュヨオ「日課」九十九頁、百十五頁、百三十八頁)

かかる愛が女子の要求と一致することは疑ひを容れない。あらゆる發達せる女子は男性の間と言ふよりも、藝術家の間に愛せられることを欲すると、エレン・ケイは言つてゐる。(「戀愛と結婚」九十二頁)

「男は自分の裡に同じく藝術的歡喜を感じてゐるのだ。と女子から思はれるやうな男子のみが、又、その歡喜を、女子の肉體並に精神に、そつと微妙に觸れることに依つて示すやうな男子のみが、現代の女子を所有することが出来る。女子は、たとへその女子を掌中に把握した時でも、矢張りその女子を思慕し續ける男子のみに屬する。そしてかゝる女子が、『あなたは私を欲してゐらつしやる。けれども私をお抱きになることが出来ない、私の望んでゐることをおつしやる事が出来ない』と言ふ時、その男

子は決定されるのである。實際、愛は、レミイ・ド・グウルモンの言ふやうに、繪具や音樂と同じく、唯或人々のみはその傾向を持つてゐる微妙な藝術である。

男子が女子を媚惑しようとする性的刺戟に應ずる女子の反撥と躊躇とは、全く根本的のもので、これは、女子の性的生活を、遠慮と恥とが發達する時には、全然蔽つてしまふのである。女子の愛は男子よりも遅れて發達し、而も長い時日を要する。女子に對する男子の慾望が自發的に生ずる傾向を持つに係はらず、男子に對する女子の慾望が唯その男子との關係の複雑な發達に伴つて漸層的に生ずる傾向を持つてゐるといふ事實には、心理的の意義が含まれてゐる。随つて女子の性的情緒は屢々より少く抽象的であり、その中心たる個々の戀人とより多く密接してゐる。「私の感覺に至る道は心を通してのことですけれど、お許し下さい。あなたの感覺に至る道は、時にもつと近道があるやうに思へます。」とマリイ・ウォルストンクラフトは戀人のイムレイに宛

て、書いた。凡ての場合には言へないが、女子の性質をこの言葉はよく語つてゐる。男子は屢々一舉にして愛に對する肉體的能力の最後の境界線まで到達するが、而も精神的境界線に達するのは困難である。これは、屢々なされる「女子は一夫一婦的であり男子は一夫多婦的である」といふ叙述の基となる確實な事實である。

性の心理

肉體的方面に於て、グットサイトは次の事實を述べてゐる。結婚一ヶ月の後、性交の充分な快感を経験して來た婦人は十人中二人のみだつた。そして婦人が性交を充分に享樂するのは、六ヶ月、一年、或は數人の子供を産んでからであり、それも自分が完全に愛してゐる男子との關係に於てのみであるから、性的満足の條件は、女子の方が男子よりも遙かに複雑である、と。この肉體的方面に就いては同様のことをエレン・ケイも言つてゐる。「戀愛と結婚」百十一頁）「女子が男子から性的満足を欲することは事實である。然しこの慾望は、多くの場合、相手の男子を自分の生命を捧げる程度に

性の愛の技巧

愛するやうにならなければ現れて來ない。然るに男子は屢々、女子を、自分の小指一本與へる程度にも愛してゐないのに肉體的に所有したいと欲する。この事實、——即ち、女子に於ける愛は多くの場合、靈から出發して感覺に至る。而も感覺に至らないこともあるが、男子に於ける愛は多くの場合、感覺から出發して靈に至る。而も靈に至らないこともある。といふ事實こそ、男女間に横はる差異の凡てである。そしてこれが兩者にとつての苦惱である。」

勿論此研究中の「人間の性的選擇」を読まれた讀者には、このマリイ・ウォルストーンクラフトや、エレン・ケイやその他がこの差異を述べてゐる。その叙述の方法が、嚴密に言へば正確でないことに氣附くであらう。例へば最も貞肅な婦人が餘りに熱い入浴をした後では、感覺の影響されるのは單に彼女の心臓に依つてのみではないことを發見する。その感覺は吾々の有する外界への唯一の水路であり、そして愛はこの水路を通して來なければならぬ。然しその男女間の差異は、それを次のやうに譯せば眞理

であるらしく思へる。即ち女子に於ては、(イ)性的刺戟の知覺の通路が優つてゐて、觸覺及び聽覺の方面の如き、男子に比較すれば優劣である。(ロ)性的機能が男子よりも總體的であり複雑であり微妙である。その結果として、(ハ)結局、神經的及び大脳の性的光輝を多分に持つてゐる。

同時にこの事も記憶して置かなければならないが、この性的差異は組織的の、單に因襲的ならぬ根據を持つてゐる實際の傾向でありながら、如何に絶對的であつても何にもならないのである。世の中には、單に後天的習慣に依つてのみならず先天的傾向に依る性的容易が如何なる男子よりも著しい女子の群が、男子のそれよりも多くないとしても、夥しく存在してゐる。性の分野に於て、變化性は男子に於けるよりも女子に於て大なるものがある。

愛が藝術であり、樂器から音樂を引出す方法であり、單に相互の承諾に依る行爲で

ないといふ事實は、小瞬間の愛に何等かの言辭上の同意を與へる。若し愛が契約の問題であり、單なる理智的承認の問題であり、問と答との問題であるならば、決してこの世界に這入つて來なかつたのである。愛は最初から藝術として現れ、そしてその後の理智と言語との急速な文法の發達は、その根本的事實を消滅し得なかつた。このことは、媚惑の第一歩を、——否恐らく媚惑全體をも、女子に妻になつて貰ふことを求める男のためのものであると誤つて教育せられた戀人たちの殆んど理解しないことである。結婚の問題が屢々冷靜な熟慮と合理的な洞察とを缺いて決定されなければならぬことは實に悲しむべきであるが、然し性的關係は、單に冷靜な計算のみの問題たるべきではない。女子が突然、未だ彼女の愛情を獲得することに成功しない男子に對して、妻たるべく承諾しなければならぬと要求せられた時、——若し彼女が自制に冷酷な動機以上に昇つてゐたならば——彼女は何故自分がさうしてはならないか、その多くの理由を間違なく發見するだらう。そして、かく正しく、冷靜にこの問題に面して

解決してから後は、彼女は恐らくその求婚者に、彼女の胸を包む鋼鐵の衣を以て接するに至るだらう。

性心の理

「愛は行爲に依つて顯示さるべきもの、言葉に依つて裏切らるべきものではない。私は豫め慌しく誓言をする極端な方法を異常であると認める。何故ならばその表示は、通告の直接通路でなく裏道だからである。」と心理學者ならぬスイス人が「戀愛論」に書いてゐる。(千九百四年「心理學の古記録」)この人は自分自身の經驗を記録して、愛に於ける精神的要素の優勢なことを力説した人である。

直接の言葉が媚惑に於て問題外であることの承認は、文明の洗練として認められてはならない。この事は注意して置く必要がある。未開人間にあつては、戀愛の申込み及びその受容或はその拒絶は象徴的に行爲に依つてなされなければならぬ。問と答と

性愛の技巧

いふ粗野な方法に依つてはならぬといふことが至る處完全に理解されてゐる。パラギユエイの土人間では、女子に對する性的自由が多分に許されてゐるが決して戀愛を賣買しない。マンテガツザの言ふところに依ると、その少女は戸口か窓口に來て、そつと、まごついた風で、水を一杯頂戴したいと男に頼む。その時若し男が無邪氣に水を差出してやれば彼女は嬉しさうに微笑するのである。メキシコのクラファミリ土人の間では、媚惑の先導が女子に屬してゐるが、その少女は先づ兩親を通じて第一歩を取り次に自ら小石を、自分の思ふ著者に投げる男がその小石を投げ返して呉れたならば、その戀が叶ふのである。夫を女子の方から選擇する地方は世界の至るところにあつて、其處では、女子が申込みの象徴的方法を執ることが多い。結婚に於て商賣的要素が多分に含まれてゐる場合を除き、同様の方法は屢々結婚の申込みをする時の男子に依つて採られることがある。

性愛の要諦は表現され得ないで豫知されなければならない、といふ事實は昔から性愛技巧の作者たち及び内外の基督教的傳説の作者たちに依つて認められて來た。即ちザクチアはその大法醫學の論文中で、夫が妻の性的欲求の徴候に注意しなければならぬことを指摘してゐる。彼は言ふ。「女子は性的慾望の萌した時、その夫に性愛問題に關する質問を發するを常とする。彼女は夫に媚び夫を撫でる。そして夫に（たとへその夫がどんなに不注意であらうとも）信ぜしめないではゐない。」

昔の印度の性愛に關する作者は、同じく女子の性的要求に對する男子の注意及び性的行爲の最初に於ける男子の熟練と思慮との重大を説いてゐる。男子は女子の快樂を生ぜしめ得るために凡てをしなければならぬ、とワツヤナは言ふ。

ギユヨオに依つて夫に與へられた助言は（性的實驗の目録「四百二十一頁」頗る異つた社會狀態下にあつてザクチア及びワツヤナに依つて與へられたものとよく似てゐる。操りが重大なことはオヴィツド前に性愛の著作者と醫師とに依つて力説されてゐる。

る。ユウレンブルビは時に依り操りが必要である（「性的神經病」七十九頁）と述べ、アドレルは精神的及び肉體的媚惑の準備を主張すると同様、この問題に於て洞察と熟練とを賦與せられた男子は、最も冷淡な女性の心臓から敏感の火花を引出すところの魅力を持つてゐる」と述べてゐる。

「世間の夫は、悪戯な子供と同じく、當然自分のものであるべき快樂を、時ならぬ時に熱望することに依つて屢々失つてゐる」と或婦人が書いてゐる。「この性交に先立つ長引かされた媚惑を退屈なものであると考へる男子は未だそれを試みたことがないのである。この媚惑は抱擁そのものと同様、夫婦の抱擁への到達であり、そして兩性關係の魅力を構成するものである。」

妻の無感覺が——夫の手に於て治癒されなければならぬことは決して稀ではない、とアドレルは言つてゐる。ギユヨオも同じく言ふ。「若しその夫が優しき研究の長引きに依つて若い新婚の妻を理解したならば、彼女のために言ふべからざる幸福と青春の

夢とを悟り得たならば、彼は永久の愛を獲得するであらう。彼は彼女の主人となり君主となるであらう。然るに若し彼が彼女を理解するに失敗すれば、彼は空しき努力の内に自ら疲勞し困憊して、その結果、彼女を冷酷無情の女の部類に入れてしまふ。彼女は義務としてのみの彼の妻であり子供の母となるであらう、彼はその快樂を他に求める。かくしてこれが夫婦間の離隔する最大の原因となるのである。かゝる場合、男子は、自らの弾き得ない曲を新しい楽器に依つて弾き得るだらうといふ望みを持つてヴァイオリンを種々に取換へる例の拙劣な樂人に類似してゐる。

かく性愛に技巧のある事實及び、性交が單に筋肉の力を以て行はれる肉體的行爲のみでないといふ事實は、何故世界の各地に於て、結婚と同時に交接が行はれないのであるかといふ理由の説明を助ける。(一)これには勿論宗教的の或は迷信的の理由が介在してゐるが、又たまたまこれは生物學的過程と調和してゐるのである。年若くして結

婚する未開人間にあつてもこれは同様である。この延引と熟練との必要は、吾々の間に於けるやうに、女子の結婚が成熟期を遙かに過ぎて、人格の精神的障病が、否肉體的障病さへも破壊するに困難である時まで延期されてゐる場合にあつて殊に大なるものがある。

附加して言つて置かなければならないが、媚惑の行爲に於ける性愛技巧は、交接といふ單なる行爲への準備に限られてはならない。或意味に於て戀愛生活は、不斷の進歩を伴ふ繼續的媚惑である。そして肉體的性交の開始はその第一歩である。殊にこれは女子に於て眞理である。セナンクウルは言ふ。(一)「戀愛の完成は男子にあつては屢々戀愛の終結である。然し女子にあつてはその開始であり、信頼の試練であり、未來の快樂の抵當であり、來るべき親和の或契約とも言ふべきものである。」又他の或著書は言ふ。「女子の精神と肉體とは與へられたる瞬間に全部を與ふべきではない。徐々に、少しづつ、多くの階級を経て後、心身とその戀人に捧ぐべきである。少女が最初

から全部を捧げるのは、恰も係蹄に捕へられた鼠が食べられるために猫に飛び掛つて行くやうなものである。それよりも、新婚の男女は二人の友のやうに相並んで住み、次第にその性的意識を如何に展げ如何に利用するかを學ぶ方が得策である。」

女子は男子と異り、性愛技巧に於て熟練した役割を演ずるやうに自然に依つて準備されてゐる。媚惑に於ける男子の役割は困難であり冒險的ではあるが、然し直線的で極めて單純である。女子の役割は、同時に全然異なる二つの衝動に従はねばならないので、常に雁木形と曲線との裡にゐなければならぬ。即ち、あらゆる性的行爲の瞬間に於て、彼女の行爲は、その慾望と(意識的或は無意識的)貞淑との結合力の結果である。彼女の航行して行く水路には一方に六頭の怪物があり、他方に恐ろしい渦巻がある。彼女の言葉は正直でなければならぬ。而も決して悉くを言つてはならない。彼女の行動はその衝動から出發しなければならぬ、そしてその方法に於て二つの演出をしなければならぬ。彼女が完全な女になり得るのは唯完全な親和の最後の手段に

於てのみである。

多くの女子にとつて、その究局の性的權化——即ちラフオード・バイクの言葉を借りて言へば、「完全なる愛に於ける最良のものであるところの思ひ切つて羞恥心なきこと」——のための條件は決してそれ自ら現れない彼女は常にその最初にさうであるべき、複雑な、二重人格の、随つて技巧的な、性的生活の究局へ無理に強ひられなければならない。そのために女子は性愛技巧に於ける役割を演ずべく、男子よりもより良く準備されてゐる。

然し性愛技巧に於ける男子の役割も決して容易ではない。それは常に、それを演ずる男子の熟練の缺如を不平とする女子に依つては理解されない。男子は女子と同じ自然的二重性を養成しないが、豫知するといふ力を持つ必要がある。そのために男子は都合よく準備されてゐない。何故ならば、傳統的男性の徳は洞察であるよりも力であるから。吾々の見聞するところでは、世界中の男性の事業は征服である。そして女性

が惹きつけられるのは、さうした征服に依つてである。この説には或真理の要素を含んでゐるが、その真理の要素は、性愛技巧に於て、これに餘りに信頼し過ぎる男子をして邪路に導き易い。暴行は如何なる技巧に於ても不可である。そして性愛の技巧に於て、女子は愛するべく打ち勝たれることを、愛すべく命ぜられることを欲する。これは根本である。吾々は時として、性愛に於ける力や征服に對する反對が、「近代婦人」の或全然新しい革命的な要求となつてゐるかの如く説かれるのを見ることがある。多くを言ふ必要はないが、これは無智の結果である。性愛技巧は、自然の作つた藝術であるから、今もその根本に於て、今まであつたと同じものであつて、女子なるものが存在しない以前から確立されてゐる。但し常に極めて手際よく演じられては來なかつたといふ事は別問題である。そして男子に關するところでは、それはこの技巧を實際よく演ずることの困難を容易にするところの男性的優越のこの傳統である。女子はその男子の力を讚美する。彼女は彼女が欲する事に強ひられることを自ら欲しさへす

る。而も彼女はその狭い範圍以外の處でいさゝかの力でも揮はれることを嫌惡する故に男子の位置は、男子の性愛に於ける拙劣に不平を零す女子よりも實際困難である。彼は世の中に於てのみならず、戀愛世界に於ても力を養成しなければならぬ。彼は戀愛に於て、彼自分の意志が相手の意志であるから最早力が力でないといふ、その瞬間を豫知しなければならぬ。同時に、更に、彼自身の征服衝動に屈服する致命的過失に陥らないやうにするため、自分自身を完全な抑制に保たなければならぬ。彼の情緒が自らの支配命令を殆んど聞かないやうな場合にあつても、さうしなければならぬ。かく見て來れば、戀愛の航海に難破する者數万、無事に入港する者數人といふ結果に大して驚愕する必要もないのである。

性的生活が健全で完全であるべきものならば、その性的生活を導く法則を長々と論議して來た。さうすることに依つて吾々が社會に對する性的本能の關係といふ考察を逸してゐる如く思ふ者がまだあるかも知れない。それで最初の無理に返つて、吾々が

尙個人的及び社會的生活の根本的事實に困難してゐるものを指摘したいと思ふ。既に信すべき理由を見た如く、結婚は大なる社會制度である。一般的方面に於て、その最高の機能である生殖は、大なる社會的目的である。然し結婚と生殖とは二つながら性的生活に基礎を置いてゐる。若し性的生活が健全でないならば、結婚は破壊される。たとへ常にさうでないまでも、又、不都合な状態にありながら生殖の過程が實行されるにしても。

この、性的生活の社會的及び個人的重大は、虚偽の道德及び同じく虚偽の貞節に影響されて、時に人爲的文明の舞臺に於ける背後に倒されることがある。けれども如何なる場合にも、人生の關係を確實に把握した人々には理解されるのである。最も未開人間にも「性的不能」の女子は絶無又は數人を數へるに過ぎないらしい。かく記録される女子が二十五パーセント(それも實際はもつと多いらしいが)であると、今日の醫學者から確言されねばならないことは、決して吾々の「文明」の大した名譽にはならない。

世界の性的組織の凡ては、相互に選擇した男女の親し接觸が相互に喜ばしいことであるといふ一般的事實に立脚してゐる。この一般的事實の下に、更に模範的事實がある。即ち性交の正式完成に於て、両者が同時の機能亢進の烈しい満足を經驗するといふ事實である。此處に戀愛の秘密が横たはつてゐるといふことが出来る。これが戀愛の基調であり、性的機能の健全な行爲の條件であり、又、多くの場合、妊娠の條件であるらしく思へる。

(註一) スワヒリに於ては、性交は結婚三日後に許される慣例になつてゐるといふ(千八百九十九年、「人類學雜誌」二—三、八十四頁、ザツへに依る)

(註二) 「戀愛論」二卷、五十七頁。

極めて教養に乏しい蠻人でさへ時にその女子の性的慾望の徴候を喚起したり待つた

りすることを堪へ又考へる。(クバライがその人種學上の研究に於て述べてゐるカソリン島の住人の興味ある事實をこの研究中「男子の性的選擇」中に引用して置いたが、それを参照されたい) カソリック時代にあつて、神學的影響はこれと同方向に働いたが神學者は淫慾の道德的罪惡を嚴密に摘發してゐた。同時に起る機能亢進が望ましいといふカソリックの主張は、實は主として間違つた意見に基いてゐるので、それは、受胎を確實にするためには、その「種子蒔き」が男女に於けると同じく女子の側にも起らなければならぬといふのである。然しこれが神學的意見の全根據ではなかつた。かくしてザツチアは男子は女子が機能亢進を起すまで持續しなければならぬものか否かに就いて論じ、それは夫の義務であると結論してゐる。若しさうしなければ、妻は睡眠中に或は、それ以上に自己興奮の方法に依つて機能亢進を覺えるのである。

彼は附加して、或神學者がこの信念を辯護したことを言つてゐる。それは殊にウルタド・ド・メンドザヤサンシエズの如きで、後者は性交に依つて満足しなかつた女子は

ヒステリイ乃至憂鬱症になる」といふ意見を持つてゐた。

現今の醫師は充分にサンシエズの説を裏書してゐる。その原因が那邊にあらうとも正常な自然的機能亢進の伴はない鋭い性的興奮に屢々襲はれる女子は、種々の神経的の又は充血的の徴候を呈し、それは活力を殺ぎ、又健康を兎角害するものである。キルシュは性的原因を持つ心臓の神経病と同じく、性的興奮のために病的に心臓の鼓動の烈くなる疾病を擧げてゐる。イングリス・ピアソンスは(「英國醫學雜誌」千九百四十年十月二十三日。千六十二頁)甚だしい充たされない性的興奮のために生ずる卵巢の苦痛を説いてゐる。これは屢々強壯な既婚婦人に見るもので、時には大疾病の原因である。某經驗に富んだオウストリアの婦人科醫はヒルスに語つた。(「故郷への道」六百十三頁)自分の處に膀胱の診斷を求めて來た七十人は、不完全な交接のために生じた子宮の充血に苦しんでゐた、と。

女子に於ける不完全な満足と機能亢進の缺如とが、主として男子の撤退、つまり中

断されたる性交に基づくものであることは屢々述べられる。又、一般に行はれるこの實行が男子の側にも多少の、或は重大な結果を生ずることも時に説かれる。(例へば、千八百九十三年・「ニューヨーク醫學會々報」中のエル・ビー・ペンクス。千九百六年十二月の「神經病學者及び精神病學者」中の「重大なる神經病及び精神的原因としての中斷されたる交接及び保留されたる交接」を説けるデイ・エス・ブリス。同じく「神經病學者及び精神病學者」千八百九十七年十月の五百八十八頁)

中斷されたる性交は、相手の達してゐる性的興奮を何等考慮することなく男子の方で突然撤退するのであるから、屢々女子に有害な神經的影響を與へないではゐない。但し機能亢進に達した男子の方は殆んどその影響を受けない。この事は疑ひもなく眞理である。然しこの實行はかゝる惡結果を必ず含んでゐると認められ得ない位に一般的になつてゐる。ブルムライヒは次のやうに言ふが、これは疑ひのないところである。「中斷されたる性交は唯次の如き女子の生殖系統に有害である。——その快感中、かゝ

る同棲の形式に依つて亂され、機能亢進を生ぜず、その後數時間も充たされない慾望の感情に依つて苦しめられるために持續するやうな女子である。」然しこれと同じ有害な結果が、正式の關係に於ても男子の機能亢進が餘り早きに失する時には生ずる。彼は結論して言ふ「似にこの現象は中斷されたる關係のみの特徴ではなく、さうした不完全に決定されたる性的同棲の結果である。」キルシュもその有名な權威ある「女子の性的生活」中に、女子に於ける中斷されたる關係の惡結果といふ問題は單に彼女が性的満足を受けるか否かの問題であると同じやうなことを言つてゐる。(同じくフユウ・ルプリンゲル、「結婚關係に於ける健康と疾病」一卷、二百三十二頁以下参照)これを明らかに、避妊の最も簡単な、最も一般的な、而も最も原始的な方法であると考へるのは理論に合つた考である。吾々は創生記に於て、これがオナンに依つて實行されてゐるのを見るが、下つて近代では、十六世紀に、フランスの貴婦人たちに採用されてゐる。彼女等は、プラントオムの言ふところに依れば、その戀人と享樂するに、この

方法を採つたのである。

保留された關係——この保留された關係は、女子に有害でない限り、恐らくその女子に最大の充足と軽減とを與へるものであらう。然し多くの男子にとつて、その經過中のこの自己抑制は、不可抗的弛緩の結果となつて行ふに困難であり、殊に虚弱な者や神経的な者は不可能である。とは言へ完全に適當な關係に對しては望ましい状態で、東洋に於ては、これが充分に認められて、その適當なことが仔細に學ばれてゐる。かくしてスウェーデンの説に依れば、印度人は、この目的のために喫煙したり、談話したりするの研究中「女子の性的衝動」参照）或研究家は、實際、關係の選引きは男子に有害な影響を及ぼすと述べてゐる。即ちアール・ダヴル・ウ・テイリアは、それは陰萎に陥り易いと述べ、（性的障礙」三版、百二十一頁）又、リュウウエンフェルは、敏捷にして妨害なき關係の頂點が、その反動の元氣を保留するために必要であると考へてゐる（「性的生活と神経的障害」七十四頁）これは弛緩することのな、烈しい腫脹の屢

性の心理

々繰り返される場合に就いて言へば恐らく眞理であらう。けれども健康な人間同志の稍々遷引したといふ場合には眞理ではない。

保留された關係はオネイダの社會では完全な結婚制度の風習となつてゐた。それで私は、その一生の大部分をこの社會に過した故ノエス・ミリアの口から、この風習が決して何等の悪結果をも齎さなかつたことを證明された。オネイダの社會では保留された關係は原則とまでなつてゐたのである。この社會では、男子は悉く理論的に言つて凡ての女子の夫であるが、然し凡ての女子に妊娠せしむることは許されてゐない。性的教導は男子に於ては春機發動期から間もなく、女子は稍々遅れてそれぞれ年長の異性に依つて開始された。この社會の社會的感情はこの風習に於ける抑制力であつて不注意な不熟練な男子は女子から避けられる。そして凡て女子に對する愛情の一般的ロマンチックの感覺も亦この抑制力である。手淫は知られず、その社會以外の人間と正式ならぬ關係を結ぶといふことも有り得ない。

性の技巧

この風習は三十年間維持されたが、遂に棄てられるに至つた。別に結果が悪かつたといふ理由ではなく、外部からの意見に敬意を表したまでであつた。ミラア氏は、この風習は關係の、より機械的習慣を尙ぶところの普通の結婚に於て更に困難になつて來ることを承諾してゐる。ミラア氏の提出した報告は千八百七十二年に發見者ジョン・ハムフレイ・ノエスに依つて書かれた「男性の抑制」(この名稱はそのオネイダの社會の保留された關係に與へられたものである)と題する著書に補遺せられてある。彼の言葉に依れば、この風習は、性交が社會的及び繁殖的の二行爲から成立してゐるといふ事實と、若し繁殖が科學的であるべきならば、これ等二行爲の混亂はない筈であり又生殖は無意識であつてはならないといふ事實との上に立脚してゐる。千八百四十四年に彼は言ふ、——妻が病弱で、それに健康な子女が得られないので性交を禁止することが、決心した結果不圖心に浮んだ。そして「この風習」を「大なる救濟」であると考へた。その結果、「幸福な家庭となつた」と。彼の説明に依ると、「ヴァアモントに住んで

最も尊敬すべき家庭に屬するオネイダ社會の重立つた人々は新英國の最上の學校に於て倫理藝術を學び、そして、普通の標準を以てすれば、性的問題に關する行動で非難さるべき點を持つてゐなかつた。然し千八百四十六年に、彼等は久しく養成しながら世界の面前に辯明しようとして準備してゐた原則に就いて、社會の新しい狀態の實驗を慎重に開始したのであつた。」と言ふ。彼は又、この社會の醫學の比較統計表は、この社會の神經的疾病的の率、他地方の平均率よりも遙かに低いこと、及び、その神經的疾病的の内僅かに二つの場合のみが、「男性の抑制」といふ風習に禍せられたらしいといふことを示してゐると述べた。この事實はグン・ド・ワルケに依つても確められてゐる。彼はこの社會の四十二人の女子を研究したが、生殖器病が不當に多いことも發見せず、又この社會の風習に歸し得べき何等の疾病狀態をも發見しなかつたといふ。(シ・イリイド「婦人科醫學の教本」千九百一年、九頁)

ノエスの信するところに依れば、「男性の抑制」は決して豫め理論に基づいて確實に

性心の理

認められた風習ではないであらう。尤もたまたまそれに近くはあつたかも知れないがこれは若し關係が全く弛緩を缺如した完全な意味に於ける「保留」であるならば恐らく眞實であらう。然し、長引いた關係が女子に……

……故に十七世紀に於て
ザツチアはかゝる風習が正當か否かを論じたのである。近代に於ては、これは何等の理論なしに偶然に實行されて、常に女子に依つて賞翫されてゐるが、同時に男子にも惡結果を及ぼさないやうである。この場合、……

性の愛の技巧

性愛の技巧と充分な又満足する弛緩の獲得とに關係するところの、……に於ける主要な變化を簡單に説くことがこの際望ましく思へる。

主として人間の……第一の重要な特徴は、それが……
……といふ事實である。心理的に言つて、……四足動物よりも遙かな進歩を示してゐるもので、兩當事者は互ひに最も大切な、最も美しい、最も表情的部分を示し合ひ、かくして親密な……調和とを増倍する。のみならず、この……追求者が逃げようとする犠牲を捕へて、……に甘んずるといふ動物の……をば、人間夫婦が脱却したといふ事實に於て、大なる意義を持つてゐる。……

……かくして結合行爲に對する彼女の熟慮した同意を表象するのである。

人間の關係行爲に於ける變化は、個人的にも國民的にも實に夥しい數に上つてゐる。

フェウルプリンゲルは言ふ。(セネエタア及びカミナア「結婚關係に於ける健康と疾病」
 一巻、二百十三頁)「私の患者手帳中には、その患者に依つて行はれたあらゆる種類の
 變化が記載されてゐる」と。かゝる變型を有害なる躰に歸すべきであると論ずるのは
 早計に失すると言はなければならない。それは問題が違ふのである。それは屢々自然
 的に又自發的に起ることがある。フロウドは旨く言つてゐる、即ち、吾々は……
 オの考が自發的に女子に現れても大して驚いてはならない、何故ならその考は……
 乳房との類似に於て無害の起原を持つてゐるのだから、と。同じく、附け加へて言ひ
 得ることであるが、……—これは男子にあつてはその實
 行に對する慾望であるが、女子にあつてはそれよりもより屢々ひそやかに現れるらし
 く思へる—は授乳の快感に於て自然的類似を持つてゐる。この授乳の快感はそれ自
 身が性的色彩を帯びるものである。(この研究中「男子の性的選擇」參照)

レミイ・ド・グウルモンはこの問題に於けるあらゆる變化は、奢侈の罪惡と共通のも

のであると言つた。(「戀愛の心理」二百六十四頁)又、或神學者は實際、普通ヨーロッ
 パにて正常と呼ばれてゐる形以外の關係變化は、如何なるものにもせよ道德的罪惡で
 あると考へた。然し一方他の神學者は、若し射精が膈内に行はれるならば、かゝる變化
 は許さるべき罪であると説き、恰も同じく或神學者が、若し射精をしなければイルラ
 マチオを化關の第一歩として許してもいゝと説いたのと同じである。アクイナスは通
 常の關係以外の變位を眞面目に考へたが、サンシエズは更に寛大で、ギリシヤ及びア
 ラビヤの自然哲學者から演繹して、子宮は精子を吸入し得る故に、變則の位置を以て
 する關係に於ても、その自然の目的を達し得る、と説いてゐる。

古代神學者の間に如何なる意見の相違があつても、この普通關係方法以外の變化は
 或特別の場合には望ましいといふことが近代の醫家に依つて充分に認められてゐる。
 即ちキツシュは、或場合、女子には……
 置でなければ性的………覺え得ないものであると言つてゐる(「女子の不妊」百七頁)。

かくしてキツシユは「女子の性的生活」に於て關係……を數種擧げて勸めてゐる。アドレルも或場合に於ける同じ……價値を指摘して、かくの如き變型は魅力に依つての如く、潜める性的感情を喚起すると認めてゐる。

かうした場合、普通以外の姿勢は實際肉體的及び精神的理由に基づいた利益を屢々持つてゐる。そして正しい變型の發見は往々にして單なる遊戯的試みの裡になされるものであるが、同時に、稀には、關係を習慣的に異常な姿勢に於てのみ行ひ續ける時女子は通常の姿勢に復しない限り決して……場合がある。

フェラチオ及びカンニンクス。——これは嚴密に言へば……ではない。即

の初歩の、或は代用……頗る廣く流布してゐる。即ち、印度では……

オが殆んど一般家庭に行はれて、これを家長に對する義務として認めてゐる。……

……に關して、マックス・デソイルの説くところに從へば、ベルリンの優秀な

娼婦は、その客の四分の一が……と言ひ、更にイタリイ及びフランスではその比例がより大であるといふことである。……覺える

女子は勿論男子よりも多數であるに相違ない。……と認

むべきで、殊に下層社會に於て多く行はれる。大抵の場合、これは避妊の希望を持つてゐるが同時に時としては男女何れかの變態性慾の結果として行はれる。肛門も或程度まで色情帶だからである。

關係……の人種的相違はこの研究中「弛緩機能」に簡單に論じて置いた。凡て文明諸國では、その最も原始的時代から、性愛技巧の著者たちが、形式的只組織的に……

……を述べてゐる。この種の著書で現存する最古のものは、恐らく紀元前千三百年の頃、チュリンに於て作られたエヂプトの紙草であらう。これには……

……イワン・プロツホに依れば、印度人は……
「アナンガ・ランガ」は三十二種の重要な姿勢を述べ、マホメット教徒の

「句へる園」は………概してこの種

の著書は西洋のものよりも東洋のものの方が、單にその徹底してゐる點のみならず、その刺戟される氣力の點に於て、遙かに優つてゐるやうである。

性心の理

今は全部失はれたが、古代ギリシヤの性的著書には、………殆んど全部女子の手に依つて書かれてゐる。スイダスの編した傳説に依れば、この種の最古の著者はトロイのヘレンの下婢、アスチアナツサであるといふ。女流詩人のエレファンチスは………を認めたと思像されてゐる。後代になつて多くの女流の著者があつたが、その一はソフィストたるポリクラストであつた。

アレチノは基督教の影響に就いて、性的問題………の領域に近いものと無視したその影響から今日漸く脱却しつつあると論じたが、その著書には………が記され、その一々に、ラファエルの高弟たるギュリオ・ロオマノの解説的繪畫が添へてある。ヴェニエロは………を記し、更に近代の一權威、フォルベルグは………

を列擧したが、如何に見ても、普通の變化………位のものである。

性的愛の技巧

性的行爲を襲ひ、これを闇黒の行爲に歸して汚辱するのは、言ふまでもなく、主として、近代文明人間の關係が、息苦しい寢室に於ける初夜の闇黒に於て行はれるといふ事實が責任を持つてゐる。この初夜は即ち晝間の疲勞が、重い肉食とアルコール飲料とに依つて起された人爲的刺戟と争闘してゐる時に外ならない。この習慣は又大部分女子が時々關係を冷淡、或は嫌惡をさへ持つて見るといふ事實に責任がある。

然し吾々よりも原始的な民族は、吾々よりも賢明である。アストロラプ灣のニウ・ギニエフ・パプア人は、ヴァ・ネスに依れば、「人種學雜誌」千九百年、五卷、四百十四頁）基督教國よりも古くから性的行爲を闇黒と結びつけてゐるには相違ないが、常に關係を戸外に持つといふ。………

(スロツス及バルテルス「妻」一巻十七章)

かくの如き例は、たとへ職業及び氣候がこれを許しても、近代の都市に於て實行することは明らかに困難である。亦、關係の後に休息をしなければならぬことには同意すべきであるが、然し勿論、初夜よりも早朝或は白晝の方が遙かに好ましい時であると考へられる。受胎は光の裡にありとミシエレは言ふ。(「戀愛論」百五十三頁) 夜間闇黒の中の關係は單なる雌との結合であり、白晝のそれは愛らしく戀しい個人との結合である。

これは廣く認められて來た。ギリシヤ人はアリストファネスに依つて知られる如く日出を關係に最も適當な時間と認め、南部スラヴ人は曉は關係の時なりと言ふ。そして多くの近代研究家は早朝のその利益を説いてゐる。ルウボウは「不能の研究」百五十一頁——三頁) 朝は關係の時であり、たとへ慾望は夜に於て、より強くとも、充足は朝に於て、より強いと言つた。オシアンダアも早朝の關係を獎め、ヴェネツトは

一世紀前に於て「人間は如何なる時に妻を性的に擁すべきか」を論じて「人間の生殖器」二篇五章) その嗜好に従ふべしと言ひ「美しき女は蠟燭の灯に依つてよりも太陽の光に依つて美を増すものである」と注意してゐる。但し數人の、例へばバルダツハの如き權威者は夜の關係の風習を甘んじて認容する。ブツシユは夜間の闇黒を最も自然な時であると考へ、「女子の性的生活」一巻、二百十四頁) フユウルプリンゲルは、早朝は「時に依り」最良の時であると考へた。(セネエタア及カミナア「結婚關係に於ける健康と疾病」一巻、二百十七頁)

一方、或人々にとつて、太陽の下に、戸外でなす關係は、それを宗教的儀式的領域にまで高めようと考へる程に、重大事であるらしい。私はこれに關してオウストラリアから受取つた通信を此處に引用する。

「言ふべからず、爲すべからず(闇黒の時を除き)と考へられるこの恥づべき事が、私の信ずるところでは、將來、春に於ける人類の宗教的祭儀に成る時があると思へ

る。あゝ、其時は何といふ春だらう！人々は極めて正氣になり上品になり貴族的（その凡ての人間が貴族に）なり、そして全部的に虚式及び迷信に反対するに至るだらう。何故ならば彼等は過去の完全な智識を持つてゐるからである。春に於ける戀人同志の關係は、彼等が許すであらうところの唯一の宗教的祭儀となる。私は時々その聖なる光榮を幻に描くが、それは叙述すべく餘りに美しいことを虞れる。『性交は言ふべからざる程に美しく、記憶するには餘りに立派であることを私は夢想した』と嚴肅なトロウは書いた。實に人間の美、喜、及び愛は、春に於て開始せられる關係の間に、その最も崇高な境地にまで達するに至るであらう。世界は一の天國となり、最も若く最も美しい戀人同志の成婚は、それを見ようとして集まる數千の觀集の前で、或神聖な平野を選んで行はれる。この平野には太陽が、情熱の聲や抱き合ふ人間の形や花や水やの夢の上に昇り、そして日出の紫金の色は三色堇に飾られた丘に反射する。（この通信の筆者はジョウジ・チャップマンの「色とりどりの堇は新婚の席に用ゐる」といふの

を思ひ出したのかも知れない）そして黄金のやうに輝く人間の肌や髪に照り榮える。この神聖な平野では、堇の馥郁とした鳥が、春の抱擁をする健康な赤裸の青春男女の聖なる句と交り合ふであらう。諸君や私はその光景を見ることは出来ない。然しそれを見れるやうに努力をすべきではないか。」

この狂文（これは十八世紀のクイノウル嬢の食卓でサン・ラムベルがしたこと無意識の反覆であるが）は、性的行爲の不自然な、人爲的な墮落に對して起らうとしよう、ある反感を説明するに役立つものである。

世界の或地方では、交接は神聖にすべきものと認められる程に重大且つ意味ある行爲となつてゐる。これは全く自然であり合理的である。それ故性交を始めるに先立つて祈禱をする風習がある。ゾロアスタアは、既婚の男女は性交前に祈れ、怪交後に、「おお、サポンドマッド、私はこの種子を汝に托する。私に代つてこれを守り給へ。これは男子であるから。」と共に唱へよと命じた。ゴロング群島でも性交の前に共に祈る

のが夫婦の習慣となつてゐる。(プロツス及びデルテルス「妻」二卷、十七章)現代の文明人は器官の中で最も重大なものとして胃を認め、愛の前にはなく、食物の前に、その因襲的の體裁のいゝことを言ふ。性交の示教的認識の墮落した儀式的痕跡さへもヨオロッパでは發見するに困難であるが、恐らくスペインでは、これを發見し得るかも知れない。ダウルネイ夫人に依れば十七世紀の同國王は王妃の寢室に入るに嚴肅な禮儀を守つてゐられたといふことで、即ち「彼はスリツパを穿き、肩に黒のマントを被り、片腕に盾を持ち、他の片腕に紐で吊るした壺を持つてゐた。(この壺は飲用ではなく、全く反對の用途を持つたものであるが、それは讀者の想像に任せよう)そして王は同時に片手に大劍を提げ、尙他の片手に暗い提燈を下けてゐなければならなかつた。かくして只一人で王妃の寢室に入つたのである。」(ダウルネイ夫人「スペイン航行紀」千六百九十二年、三卷、二百二十一頁)

性
の
心
理

性
愛
の
技
巧

性愛の技巧を論ずるには、交接の中心的事實を第一に置かなければならないと言ふのは、この事に關して一般に無智であるため、又、この事を陰蔽しようとする不幸な偏見を持つてゐるためである。ヨオロッパ全土に擴がつて聖母と基督との崇拜を叫んでゐる基督教會の傳説に依ると、この聖母とその子たる基督とは全然性的關係がないといふことになつてゐる。そのために(この基督教會の傳説のために)結婚した戀愛の裡に神聖にして明言せらるべき理想を發見しようとするあらゆる試みは微塵に失敗に歸してしまつた。教會自身の結婚式を高めようとの努力さへも、それ自身の理想に依つて否定されてしまひ、その影響は今日でさへ吾々の文明を壓抑するのである。ワルト・ホイットマンがその「アダムの子たち」を書いた時、彼は世界のあらゆる地方に健全に自然に存在して來た性愛の宗教的性質の概念に對して、不完全な表現を與へたが而も未だそれを依然として、恐ろしくは思はないまでも奇妙であり新奇であると思つてゐるところの基督教國の闇黒に透徹することをしなかつた。そして性の嚴肅を認め

ることの拒絶は、最高の性的行爲そのものゝ上にさへ、暗黒と不名譽との布を覆つてゐた。それは太陽の光から遮られ、崇拜の世界から追はれてゐたのである。

性的行爲は性的技巧の見地から重大であるが、それは單にこれを圍繞する無智と偏見のためのみならず、同時にこれが結婚生活の心理的方面に關しても眞の價値を持つてゐるためである。屢々引用するフランスの醫家アムプロオズ・パアレは言ふ。「これ等の器官は家族中に平和を齎す」と。如何にこのことが現れるかは時々ペイの日記に説明されてゐる。同時に、殆んど述べる必要もないが、この家庭平和の古代の源は、文明の成長と共に更に強められて來た性的必要に於ける無限の變化に依つて複雑にされる傾向を持つてゐる。(一)

性愛の技巧は實に、性交の成立を以て漸く開始されるのである。その關係の整調に於て、自然の力全部は實に強く働いて、完全に望ましい状態(現代文明の世の中ではこの状態は實に稀であるが)の下に、技巧の智識及びその運動の得られ得べき熟達

殆んど自ら生ずる程である。性愛に於ける技巧家の眞の試験は、自然の興味が既に得られたので、或は得られたと思つたので弛緩し始めるその時を超越してそれを實行するといふ熟達の裡にある。性愛技巧の全部は、同じ人間の中に、永久に或新しきものを發見することに存する。即ち性愛技巧は愛を喚起するといふよりも、愛を留保するの技巧でさへある。さうでなければ、それはシエクスピアの作中にある如き淫樂に墮ちてしまふ。然し記憶して置かなければならないが、最も嚴密な自然的見地から言つても情熱の移動は通常嫌惡に向ふものでなくて、愛情に向ふものである。(二)

(註一) これは例へば、千九百八年、十一月、「新時代」中の「性的差異」、ルトゲルスに依つて論じられる。

(註二) 即ちエスキモー人は、ラスミユツセンに依れば、時々妻の交換をするが、自分の妻が最もいゝことを發見してゐる。

久しく不自然に別居してゐて、その間に性慾と性慾の満足とを人為的に断たれてゐた青年男女が、再び會つて結婚生活の放縱に没頭する時、それは性愛技巧を學ぶに最良の状態とは決して言へない。彼等は性交に於て放埒の限りを行ひ易く、ために技巧を學ぶに必要な理性を凡て不注意にも失ふやうな結果となつてしまふ。エレン・ケイは言つてゐる。「世の中には、毎日、そして永久に、彼等の習慣と意志と、互ひに對する好愛とを指圖するやうに強ひられないならば一生を通じて互ひに愛し合ふこと出来る夫婦がある。」

現代の文明生活の傾向は悉く、人間の問題に於て個人主義に向ひ、個人的習慣及び性癖をさへも特殊化し、神聖化するのである。この個人主義は因襲の專横な命令に依つて、又は抑制を失つた情熱の力に依つてさへも一舉に打破されることは出来ない。因襲及び周囲の偏見に屈服するのではなく、青春の性愛に不注意に没頭するのではなく、

或は單にお互ひの感情を害するのを虞れるのではなくとも、青年夫妻は屢々機を熟するのを待たないで親和を結ぶことがある。而もこれは、完全な親和に達するに失敗するといふよりも結婚の永久性に災害さへ及ぼすのである。今日、結婚の道德的衛生を説く識者が、若し出来るならば夫妻は寢室を異にすべしと言ふのは、これがその主要な理由の一つである。エレン・ケイの如きは全然家を別にすべしといふ説にも反對してゐない。勿論、最も幸福な結婚は、時として、最も接觸した親和を持つてゐる夫婦の間に見られる。但しそれは兩當事者がさうした親和に特に適した者でなければならぬ。プロツシュの斷言したやうに、親和が愛に致命的結果を及ぼすといふのは眞實ではない。それは根を持たない愛には致命的結果を及ぼすかも知れないが、深く根を張つた愛には却つて榮養になる。然し、別居が愛の強烈な新味と立派な理想主義とを保持するに必要であることも矢張り眞實である。ランドオは言ふ。「別居は理想的美の眼に見えざる母である」と。久しく別居する間々に比較的短時日しか會ふことを得ない

既婚の戀人同志は、その會ふ場合、蜜月が一生連續してあることを經驗するのである。(1)

愛に對して同居が危険であると同様に、別居も危険であることは言ふまでもない。別居も餘りに長引けば、同居と同じく、結局愛の記憶を消し、更に進んで、屢それを包むところの外界と複雑な接觸をすることに依つて嫉妬の問題を惹き起す。この嫉妬の問題は性愛技巧に於ける根本的のもので、この際、簡単に述べて置く必要がある。

嫉妬は動物生活の最初に當つて見られる根本的本能に基礎を持つてゐる。デカルトは嫉妬に定義を下して「所有保存慾に關する恐怖の一種」であると言ふ。動物の世界に於ける獲得のあらゆる衝動は慾望の對象物を奪ひ取らうとする敵の出現に依つて、より大なる活動へと刺戟される。この事は動物界の根本的事實であり、生存せんがため傾向であると思はれる。何故ならば、食物を漁りつゝある仲間の傍に立つて、それを見てゐることに眞の満足を感じるのみである動物は、早々に死滅すに相違ないか

性の心理

らである。然しこの事實の中に吾々は嫉妬の自然根據を持つてゐる。(1)

この衝動が動物界に最も早く最も烈しく現はれるのは食物に關してである。他動物に關係する時、彼が自分で持つてゐる時以上に貪食することはよく知られた事實である。彼は飢餓のために食ふことは止めるが、その食物を敵の手から、彼の知つてゐる唯一の強い箱、即ち胃の中に保存しようために食ふ。同じ感情が動物界では性の分野に移つて来る。更に進んで犬その他の家畜が主人に對する關係には、嫉妬といふ感情が屢々著しく現はれてゐる。(2)

嫉妬は動物の間、野蠻人の間、(4)子供の間(5)、或は老人、墮落者、殊に慣性アルコール中毒者(6)の中に最も著しい情緒である。最も完全に嫉妬の悲劇を體現してゐる人間の、心理創造をした大藝術家が、明らかに嫉妬を間歇的遺傳或は病理的產物であると認めてゐる事實は特に注目して價する。——シエークスピアはオセロを野蠻人とし、トルスルイは「クロイツェル・ソナタ」のボズニスシェフを精神病者としてゐる

性の愛の技巧

る。嫉妬は反社會的情緒であるが、或人々はこれが貞操と誠實との原因となつて來たと説いてゐる。例へばゼセルは、嫉妬の反社會的性質を是認し、その苦惱となり災害となる例證を擧げながら、而もこれを性的貞肅を養ふために必要なものであると考へてゐるらしい。これと反對の極めて決定的意見もある。即ちエレン・ケイは嫉妬はあらゆる他の陰と同じく、唯戀愛の夜明又は日没にのみ生ずるもので、若し矢張り太陽が天頂にあるとすれば、男子はそれを自分の權利と思はず奇蹟と感ぜなければならぬ」と。(七)

たとへ嫉妬が、動物の間に於けると同様に、文明の初期に際して有利な影響を持つてゐたとして、それ故に更に進歩した文明社會に於ても望ましい情緒となつていふことは決して言ひ得ない。世の中には憤然とか恐怖とかの如き、複雑な文明社會に於て獎勵したくない、寧ろ拘束し抑制したと考へる多くの原始的情緒がある。吾々が嫉妬に獨創的價値を與へたい氣持になるとしても、それはその位置を、これ等憤怒、恐怖

等の情緒中にあるものとしなければならぬ。

(註一) クロウストンは言ふ。(精神の衛生「二百十四頁」)「私は故レイロツク教授に贊意を表す。教授は人心の微妙な研究者であつたが、その説に依ると、夫婦は幸福であるためには常に一緒にゐる必要はない。事實、合理的の別居は究局の更に密接な結合に赴かしめるものである」と。情熱の長引きが別居に伴ふことは述べる必要もあるまい。アライ・ウォルストンクラットの言ふやうに、情緒の永續は唯別居と不幸との裡にある。(「女子の權利」原版、六十一頁)。然し彼女はイムレイに宛てた戀文の中ではかう書いてある。「私は一緒に暮さうと思ふ同志は久しく別れてゐるべきではあるまいと思ひます。」

(註二) アーノルド・エル・ゼセルは、その興味ある「嫉妬」の研究(千九百六年十月「亞米利加心理學雜誌」)に於て次のやうに述べてゐる。「廣義に見れば、嫉妬は競争場

裡に於ける生物學的態度の必然的な心理的附屬品であるらしく、人間がこの嫉妬を殆んど生きんとする意志と異語同意に考へて、憤怒或は恐怖と同程度に根本的のものであるとする位である。……社交界や相互扶助の裡には、吾々は楯の他の半面を見る。然し嫉妬は反社會的ではあるが、動物學的經濟に於ける機能を持つてゐるので、即ち群集に對する個人を保持する。これは純社會的情緒に對する自然の調整物である。」

(註三) ゼセルの「嫉妬」の研究中には多くの例證がある。

(註四) 未開人間の嫉妬は、蠻族の風習に依つて變形されたものとなつてゐる。テスキムツセンはエスキモー人の妻交換の風習に就いて言ふ。「北極人」六十五頁「或男は妻が他の男の言ふことを聞かない場合にだけ彼女を殴つたと言ふ。彼女はその男以外の者とは何をもしないのが常だつた。——そのみが彼女の缺點だつたのだ！」而もそのエスキモー人が極端な嫉妬を起すことをラスミツセンは他の場所で記してゐる

(註五) モール「子供の性的生活」百五十八頁及びゼセル「嫉妬の研究」參照

(註六) 嫉妬は飲酒家に共通の特徴である。ビルンバウムの指摘してゐるやうに、(千九百九年一月、「性的問題」中の「飲酒家の性的生活」)この嫉妬は多くの場合、妻にとつては多少根據のあることで、何故なら彼女は夫に嫌惡を感じて自然に他の場處に同情と共鳴とを求めるからである。然しアルコール的嫉妬は實際支持の根底を越えて幻想と錯覺と混ざることがある。(千九百八年二月、「哲學評論」中のデュウマ「羞恥論」及び、千八百九十三年六月「神經病研究及び精神病研究」中のステファノウスキ「病的嫉妬」參照)

(註七) エレン・ケイ「戀愛と結婚」三百三十五頁

クラツパアト嬢はこの問題を論じて、「科學改善論」百二十九頁——百三十七頁
嫉妬は婦徳を教へ込むことに適くといふダアキインの説(「人間の遺傳」二卷、四章)に同意したが、附加して、嫉妬は同時に女子の服從の原因となつて來たから今は排除す

る必要があると言つてゐる。「吾々を出来るだけ早く救ふには嫉妬が根本である。さうしなければ、性の對等を叫ぶ大運動も必ず大障礙に會はないではゐない。」

リボオは「感情論」七十五頁、「情熱論」九十一頁、百七十五頁、主觀的に言へば嫉妬の評價は人生の持つ理想に従つて異らなければならないが、客觀的に言へば、吾々は不吉な評價に傾かざるを得ないと説いてゐる。「短き情熱さへも普通生活に於ける破壊である。それは病理學的狀態でないとするも、異常であり贅肉であり寄生物である。」

フォレルは「性的問題」(五章)同じ意味を力説して、嫉妬的な事を産まないことに依つて嫉妬を除去する必要ありと考へてゐる。彼は言ふ。嫉妬は「吾々の動物祖先から繼承した性愛の『發光』或はよく言ふも對照的反動が不幸にして最も深く根を張つたものであると。嫉妬は動物性と野蠻性との遺物である。私は『害されたる名譽』の名目の下にこれを辯明して高い臺上に置かうと試みる人々にこの事を考へて頂きたい。不誠實な夫の方が嫉妬深い夫より十倍も女に對して望まれるのである……吾々は屢々『正

性の心理

當なる嫉妬』といふことを聞く。然し私は正當なる嫉妬といふものはないと信じてゐる。それは常に問題遺傳的或は病理學的のもので、最もよく評價するも野蠻な動物痴愚の範圍を越えないものである。その性質、——その遺傳的素質に依つて嫉妬深き男子は確かに彼自身の生活のみならず妻の生活をも害する。かかる男子は結婚に係はらないでゐるべきである。教育と選擇とは相俟つて、出來得る限り人間の頭腦から嫉妬を除去するに努力しなければならない。」

エリック・チラアドはその「嫉妬」の論文中で(千八百九十六年九月「自由評論」)、嫉妬は家庭を作るといふ説に反對して、「嫉妬は家庭は破壊する主要な力である」と宣言する。即ち「利己主義がこれを感情の涙を以て洗ひそして科學的探求の風から蔽つてしまつてゐる限り、これは蔓であらう。然しやがては雜草のやうに愛の園からこれが焼き拂はれる時が來るのだ。この社會に於ける惡臭的影響は看過するに堪へないものである。これは愛の神聖なる壇場を混亂と憎惡との地獄に移す。これは自殺を誘致

性の愛の技巧

し、數千の者を飲酒に放埒に狂氣に追ひやる家庭を作るといふのか！ 君の結婚した男の友は、その妻に微笑するあらゆる男子の裡に、ありさうな誘惑物を見るではないか。又妻の女の知己を嫉む者もあり、妻が子共たちに注意し過ぎるために傷つけられる者もある。或女は夫の知合の女を悉く嫉妬し、又或者は自分の飼犬を嫉妬する。君は完全に専有しなければならぬ。さうしなければ完全に愛しないのだ。君は君が一生を賭けてそのために自らを監禁した人以外に何人をも崇拜してはならない。昔からの交際は断ち、新しい交際は作らないことにしなければならぬ。何故なら、それは所謂その『家庭を作る』といふ羨しい情緒を呼び起さないと限らぬからである。

たとひ性的問題に於ける嫉妬を文明的進歩の方面に働く情緒であると許し得るとしても、これは依然として單に外形的行爲のみであることを指摘しなければならぬ。これは其の影響を殆んど持つてゐない、或は全然持つてゐない。嫉妬する人間はその

嫉妬に依つて自分自身を愛すべきものとすることは稀で、多くはその反対なのである。彼の嫉妬の効果は、嫉妬の理由を更に増加するか、或は喚起するか位のもので、同時に、虚偽をし奨励するのである。

完全な代表的形式を持つた家庭的嫉妬の事情と経過と結果との凡てが、ペビス家の歴史に於ける重要な挿話に依つて巧みに説明され、この大日記者に依つて充分に忠實に寫し出されてゐる。その罪は——妻の小間使を抱擁したといふので、大したものではないが、然し、ペビス自身が認めてるやうに全く許し難いものである。彼はその三十六歳の時、千六百六十八年十月二十五日に書いてゐる。

「夕食後、私は髪をデプロに梳らしたが、たまたまそれが、私にとつては嘗て経験したことのない大きな悲しみを私自身に持ち來すやうな事になつた。と言ふのは、妻が不意に這入つて來て、.....私

はそのために全くどうしていいか解らなかつた。娘もさうだつた。で、私は何とか言ひ抜けようとしたが、妻は黙りこくつて、怒り出した。……心からこの自分の馬鹿氣た行を惱ましく思ふ。……こんなことでこの月は終つた。」それから數日の後、彼はかう書いてゐる。「哀れな妻と喧嘩をしてから後、完全ではないまでも稍々心に落ちつきが出来て來た。自分が娘にした愚かしい行を自分は悲しくも思ひ恥しくも思つて來た。そして殊に娘に對して氣の毒な氣持がしてゐた。十一月六日、妻はウイレット(デグ)に私を會はせまいと言ふので、毎日私の着代へを自分でして、私が彼女に視線を投げはしないかと思ひ張り、彼女の部屋に行きはしないかと引き留める。十一月九日、私は小さい紙片をデグに投げて、彼女に私が嘗て彼女を接吻したことを否定し續けてゐるから氣を鎮めるやうにと書いた。實は冒險的に嘘を言つたので、それは、私が第一に哀れな娘は減びることになつて私には苦しくて溜らないといふことを知り、第二に、若し妻が凡ての事情を知れば、彼女にとつて再び私と平和に暮して行くことは出來な

くなり、従つて吾々の生活全體が不快なものになるといふことを知つたからだつた。娘は讀んで、私が告げたやうに、その紙片を通りかかりに私に投げて返して寄越した」けれども翌日、彼は「非常に弱つてしまつた。」と言ふのは妻がその娘から接吻の告白を聞いたからだつた。幾晩かの間、ペイス夫妻は共に眠りもせず双方で泣き明かした。デブは他處へ勤口を得て十一月の十四日に彼の家を去つたが、そのさるまでペイスは彼女に會ふことが出來なかつた。妻は監視して眼を離さないでゐるのだつた。デブのことが喧嘩の原因とならない内はさうでもなかつたのに、今ではペイスは明らかに、この娘に強く惹きつけられるのを感じた。十一月十三日に、彼女が愈々明日去るといふことを知つて彼は書いた。「實際は、私のこの娘の貞操を保たうといふ善良な氣持を持つてゐたのだ。」然し彼は「妻がこの手段に依つて、恐らく、どんなに私を永久に壓迫するだらうか、又私が彼女の奴隷となるだらうか、それを見るのは尙堪らなかつた。」而も彼の、妻に對する愛は決して消滅せず、妻の彼に對する愛も消滅しな

かつた。彼は言ふ。「此處に注意して置かなければならないが、私は妻に、一年前に比して、この喧嘩が生じてから後は夫として幾度も嘘を言った。」翌日は日曜日だったがその次の月曜日に、ペビイスは直ちに探索を始めて、デブの行先を追ふことになった。十八日になつて彼女を発見した。彼は一緒に馬車に乗つて彼女に接吻をし、思ふままを振舞つた。そして同時に「貞操に注意するやうに、神を恐れるやうに」と彼女に忠告し、自分のしたことを他の誰にも許してはいけなさと教へ、更に若し彼女が自分に會ひたいならば會ひ得る方法があるといふことを打ち合した。ペビイスは万事が自分の満足するやうに極つたことを感じて、内心の歡喜を隠し切れなかつた。然し、その歡喜は長続きしなかつた。即ち妻がその翌日は、彼とデブとの會つたことを嗅ぎ出したからだつた。ペビイスは最初の間それを否定したが遂に白狀した。以前にも増した恐ろしい騒ぎになつて彼は全く驚いてしまつた、妻は彼を棄てて出て行くと言ふのだつた。彼は決然としてデブを棄て、神に誓つて再び同じことをしない覺悟を極めた。

けれどもペビイス夫人は、夫がデブに手紙を書かなければ承知をしなかつた。その手紙は、彼女は娼婦に毛の生えた位の女で、彼は彼女を憎むといふのだつたが、これを受け取つたデブは何も言はないで男を許した。それはペビイスの策略のためでは全然なく、その手紙を手渡す役をした友人の思ひやりのためだつた。ペビイス夫人は、それのみでなく今後彼が外國に出掛ける時には必ず何處へでも事務員を連れて行くといふ約束をもさせた。この記録を見れば、ペビイス夫人が嫉妬深い復讐的な妻の役割を首尾よく巧妙に演じて、そのフランス式の小さな踵を遠慮なく、その平伏する天と巔争者との中に踏み込んで行く狀が解る。不幸にしてこの結末がどうなつたかは知る由もない、何故といふにペビイスはその後間もなく眼が悪くなつて日記を續けてゐないのだから。然し、吾々が、この恐らく代表的記録であらうと思はれる挿話を全部通讀すれば、夫も妻も、彼等の這入つてゐる平凡な立場のために全然用意を缺いてゐるところが明瞭である。その各々が著しく意氣地なく屈辱的である。その結果、夫は問題と

なつた娘に純な強い愛情を感じる。そして、たとひ事件の生ずる毎、妻に餘儀なく屈伏させられるが、而も結局彼は最後には最初通りのままで残るのである。夫妻共に別れようとの希望少しも抱いてゐない、結婚の羈絆は破れないが、一方の不眞面目に依つて墮落し、そして嫉妬は他方に強制に依つて敵意を植ゑつけるのである。

然しそれが關係する凡てに及ぼす有効といふ問題、不幸といふ問題を離れて、兎に角、嫉妬があらゆる文明の傾向と一致しないといふことだけは明らかである。吾々は他のあらゆる關係に於けると同じく、性的關係に於て或程度の相違があること、及び吾々が多くの悪と不正とを永存させ續けない以上、この事實は而し認められなければならぬことを見て來た。又吾々は吾々の進歩が道徳的責任と自制との中に絶えざる増加を含んでゐること、及びそれが高い程度の誠實を意味してゐるのみでなく、亦、如何なる人間も他人の情緒と行爲とを支配する何等の權利或は何等の勢力をも持つてゐ

ないといふことの承認を意味する。エレン・ケイの言葉を借用すれば、若し戀愛の太陽がまだ正午に懸つてゐるとすれば、それは畏怖と満足とを以て感謝すべき奇蹟であつて、決して要求すべき權利ではない。嫉妬の要求は結婚の權利の要求と共に崩壊するのである。

同時に一人以上の人間を、殆んど同じ程度の優しさを以て愛し得るといふことをプロツホは言つてゐる。「現代の性的生活」第五章）彼は附加して、近代文明に依つて惹起された廣汎な心理的相違は、この二重戀愛人の人間に於てその全量を見出すことが困難であるから、そしてこれは男子と同じく女子にも適用し得る、と言つてゐる。

ゲオルグ・ヒルスも、女子が男子と同様に一時に二人を愛し得ることを記憶せよと述べてゐる。「故國への道」五百四十三頁——五百五十二頁）彼は言ふ。男子は自分自身に媚びる、即ち女性の心情、或は寧ろ頭腦は一時に一人の男子のみを支へ得るもので

若し第二の男子が其處にありとすれば、それは賣淫の如きものに依つてである。といふ偏見を持つてゐる。殆んど凡ての性に關する著作家、詩人、小説家、否、醫師や心理學者までもこの階級に屬してゐる。彼等は女子を所有物と見なす、故に、勿論二人の男子が一女子を所有することは出来ないといふ。(但し小説家の中には異例があつて例へばトマス・ハアデイは屢々同時に二人の男を戀する女を描いてゐる)この、女子の心理的能力を低く評價しようとする男子側の希望にヒルスは反對したのである。彼は言ふ。「今日は愛と公平とのみが結婚の正しい動機として數へ得る。近代の男子は愛する妻に、彼自身が結婚前に執つたと同じ自由を與へてゐる。若し彼女が望まれる通りその自由を利用しないならば——それは實に結構である。然し、其處には虚偽なく欺瞞なからしめねばならない。近代の結婚の缺くべからざる基礎は限りなき誠實と友誼と、深い信頼と、獻身的の愛情と思慮とである。これは姦通に對する最良の保護である。……」

或人にとつては、性的關係に於ける相違を認めること、自ら課した制限を越える一夫一妻主義の傾向は、よし見ても悲しむべき必要であり、高尚な理想からの嘆くべき墮落であると思はれてゐる。然しこれは全然誤解である。一夫一妻の大なる不正とその最も重要な弱點とは、その社會の消費に對する自己集中の傾向である。惡魔は常に妻及び子供の形して男に近寄るとヒントンは言ふ。家庭は未來の市民を作るべき子供を創造する最良の機關であるといふ點に於て大なる社會的勢力であるが、又或意味に於ては反社會的勢力である。何故ならば、これは社會を激勵するに必要な精力を不當にも吸収する傾向を持つてゐるから。その事實が人間の歴史の初期發達時代に於て、社會的膨脹と凝集とが第一に必要なであつた時には、一夫一妻制度の變形に導いたといふことは可能である。或人の言つたやうに吾々は偶然に庭の平石を持ち上げる時に小さな巢を作つてゐる毛蟲類の集合を時に發見するが家庭といふものは屢々この毛蟲の集合に似る傾向を持つてゐる。感の問題は大きく、その問題に對する吾々の注意も亦

大きくなければならぬ。従つて愛はそれ自身の中に完成してゐる小さな内ではないといふことを常に記憶して置く必要がある。放散するのが愛の性質である。恰も家庭生活が主として將來の民族養成といふ社會的目的のために存在するやうに、家庭的愛もそれ以外の者に同情と愛情とを擴張することに於て社會的目的を持つてゐるのである。(一)

性的の世界と離れて男女が如何なる程度まで互ひに親しい友情を持ち得るかの問題に就いては古來よく論じられてゐる。(二)男子も女子も決して性的關係に入らない友情を互ひに經驗し得ることは疑ふの餘地がない。然しこれは必ず特殊の状態——即ち一般に最も接觸する最も親密な友情を排除する状態下にあつてのみ起り得ることである。若し既に吾々の論じたやうに、愛を享樂と友情との結合として定義し得るならば友情は必然的に情的關係に性的關係に入らざるを得ない。性的關係に入らざるを得ない性的感情が友情に吞まれると同じく、異性間の友情は——若しその兩當事者が若く

して健康であり且つ美しかつたならば、性的感情に吞まれ易いのである。この二つの感情は常にその間に横はる脆い人爲的障得を以て境せられて對立してゐる。女子に友情を申込んだ男子は大抵、最初より暖かい情緒を用意してゐる場合を除き充分な満足を得て受け容れられない。そして男子に友情を申込んだ女子は大抵相手が愛の申込を以て應ずるのを發見する。極めて屢々友情は最初から名義を異にする單なる愛、或は結婚申込のための媚惑である。

(註一) シュレムプの言ふところに依れば、ゲエテは「エグモント」に於て、女子が彼女に對する彼の愛以外に何物も知らない男子の愛に依つて不快にさせられること、及び、彼女自身を超越した、より廣い世界に横たはる目的を持つた男子に、自分を捧げるのは容易であることを描かうとした。これには深刻な眞理を含んでゐる。

(註二) この種のプラトニツク友情を論じた致人の著作家(多くは女子)のが(それ

は殆んど一様に異つたものであるが)例へば千九百年三月の淑女界に見ることが出来る。

或婦人が書いてゐる。「種族と社會」第一卷、第七章は發表された手紙に依る)「長い日月の間に、その意味が全く排除されて不満となつて來た。

そして私は信ずる、男子は、意識的にも、無意識的にも、自分が肉體的に惹きつけられるやうな女子とのみ最も密接な關係に入り得るものである。即ち彼は彼自身をその女との肉體的關係に置いて想像し得ないやうな女子と最も密接な精神的關係に入ることとは出来ない。彼の燃ゆるやうな希望は、その女を所有すること女の全部を所有すること、肉體と同時に精神を所有することである。そして女子も亦、男子に對する精神と肉體と二つながらに含まない親しい關係を想像することは出来ない。(勿論私は健全な神經と健全な血統とを持つ人々に就いて言つてゐるのである。)果して女子は年々

性の心理

性の愛の技巧

「何故あの人は私に接吻しないのだらう? 私の魅力が足りないのだらうか?」といふ時々内心に湧く疑問なしに男子とフラトニツクの愛を持続し得るであらうか? そして彼女はその内心の隠れたところでは、その接吻といふ言葉を、フランス人が時に用ゐるやうな、より以上に複雑な意味に於て用ゐることがないであらうか?」

これには言ふまでもなく眞實の言葉がある。性愛と友情との境界は漠たるもので、抱擁と嚴格に拒否し或は肉體的接觸の如何なるものをも拒否する精神的關係なるものは、強ひられる傾向を持ち、且つ如何なる完全な友情にも致命的であるところの、言ふべからざる思想と慾望とを惹起するのである。

言ふまでもなく唯一の完全な「フラトニツク友情」は第一歩の性的親和の入口を通過して到達したるそれで、その場合には、悪い戀人同志は、彼等が斷然と性的の舞臺を横切つた時、極めて良い友人同志となり得るのである。

満足すべき友情は兄妹の間に存在し得る。何故なら彼等は幼年時代から肉體的親和の状態にあつて、凡ての性的好奇心が缺乏してゐるから。又最も尊敬すべき「プラトニック友情」は屢々、同情と愛情と共通の興味とが性的情熱よりも永久生き残つた場合の夫婦間に見られる。サント・ブーヴの言ふ如く、傑出した男女間の殆んど凡ての有名な友情に於ては、(その或場合には吾々が實際に知り、又或場合に推知し得る通り)一時の情熱が友情の最も貴重にして親密な秘密を開く黄金の鍵として役立つたものである。(一)

性的の門を通過して到達した友情は、親和を持ち、且つ、同性間の通常の友情には得られない精神的とも言ふべき性的性質を、その底に留めてゐるものである。これは性的情熱が不可能となつてから後の夫婦間の、幸福なる状態にある、遙かに高い究局の關係に於て眞實である。彼等は既に情熱の戀人たることを中止して單なる友人、單なる配偶となる。且つ彼等の關係は子供が親に對し、親が子供に對する態度から借り

た要素を受けてゐる。あらゆる人間はその第一年から全世界に顯はれ得ない子供の或物を留めてゐる。指導する、父の、又母の精神の或物を得てゐる。夫と妻とは各自互に對する子供であり、又代り合つて親と子供である。そして此處で女の方は尙或性的優越性を留めてゐる。何故なら、彼女は最後まで、男子がさうであるよりもより多く子供であり、又男子が父であるよりも根本的により多く母であるから。

(註一) これには勿論重大な例外がある。即ちメリメエがエンニイ・ダツクアイン嬢に對する友情の如きこれである。これはメリメエの方が終始プラトニックであり、嬢の方も、被の態度に適應したのである。

グロオスは、愛は實際に性的本能と親たるの本能と、この二つの結合を以て生ずると指摘してゐる。

トマス教授は言ふ。「性と社會」二百四十六頁「所謂幸福なる結婚は男子に對する女子の母たる興味の伸張を通過した平衡を示してゐる。(女子はそれに依つて彼女が子供の要求を世話するやうに男子の要求を世話する——實際子供として彼を育てるのである。)或は男子が女子に對して愛撫する動物等に與へる養育と愛情との伸張の内に到達した平衡を示してゐる。」

或婦人は書いてゐる。「母子間の絆に含まれる献身を、夫婦の關係に加へる時、結婚の結合は、それが價する又この世に於て羨られ得る高尚な美しい威嚴にまで高められる。それは同情を、愛を、完全な理解を、兩者の持つてゐる缺點、弱點をさへも包含する。」

他の婦人は言ふ。「凡て眞の女子の愛の根本は母の優しさである。彼女の愛する男子は、たとひ彼女が深い尊敬を拂ひ得るにしても、同時に成長した子供である。」

キツシュはその「女子の性的生活」中に言ふ。「この職業は頗る困難である。然し近代の賢明にして有徳の妻は、その單一の個性間に、アスパシアの魅力とルクレスの貞節と、コルネリアの理智的偉大とを總合すべく努力しなければならない。」

昔のラ・チア・フィンチダと稱する小説にこんな事が記されてゐる。「女子は街頭にあつては天使たれ、教會にあつては聖者たれ、窓にあつては美しかれ、家にあつては誠實たれ、そして寢床にあつては惡魔たれ。」

一方、女子に依つてなされる男子に就いての要求は殆んど餘りに高くして確たる公式にして示すことが出来ない。ヘレン・ストツケルは言ふ。「戀する女子の中九十九人までは信じてゐる、——たとひ他の千人の男子が愛する女に愚かな振舞をしたり、或は、見棄てたり残酷に遇したり欺いたりしても、彼女の愛する男子のみは例外であり他の者とは違ふのであると。女子が男子を愛するのはこの理由に依る。」

その愛が實に恐ろしい啓示を成し且つ實に深い影響を最大の才能と智力とを持つた人々にさへ、又その人々の精神的活動にさへも與へるのは何故か、それを理解し得るのは、吾々が性愛を作る要素の高い複雑な性質を明瞭に知る時のみである。ゲエテがフラウ・フォン・スタインに對する關係、ワグネルのマテイルド・ウエSENDンクに對する關係、或はロバートとエリザベス・ブラウニングの關係等を説明するに役立つところのものは、單なる情熱でもなく、性愛技巧に於ける如何なる意識的の熟達でもないのである。(一)

性愛技巧を論ずることは何故に性的衝動の社會に對する關係を論ずることの中にする必要があつたか、その理由は今諸君は明瞭であらうと思ふ。人間個々の性的事件位には秘密的で個人的なものはないことは事實である。而もこの性的事件が社會生活の基礎に横たはり且つ、善かれ悪しかれ、國家の最高目的なる生殖行爲の條件を備へてゐることも亦事實である。それは、愛の問題が、種族の問題に突入すべき傾向となり

易い程に純粹の個人的興味であるがためである。吾々は愛の問題が種族の問題を助けるといふことのみならず、又愛はそれ自身に依つて獨立すべき、それ自分の價値のために認めらるべき、獨自のものであり、必要なものであり、社會的全要求でさへあると悟らなければならぬ。

(註一) これ等著名な人々の愛の手紙は出版になつてゐる。ロオザ・メイレデルは「女性論」二百二十九頁以下) 最も男性的な勇ましい天才も愛する女子の靈感に對して自分自身を謙遜な絶對的態度に委したといふ問題を論じてゐる。ブラウニングの場合「下界が知れる最も驚くべき物語の主人公と女主人公」と評されたもので特に有名である。(エレン・ケイはこの見地から「男性」に於てこのブラウニングを書いた。) 女子として最も智的傑出してゐた一人マリイ・ウオウルストンクラフトの場合も、彼女が愚者のイムメイに與へた手紙は英國に於ける最も情熱的にして悲壯的な愛の手紙の一

といふことが出来る。

社會學者タルドの遺著たる愛に關する深刻な暗示的研究中に、これに就いての興味ある説が載つてゐる。「社會は愛の問題よりも種族の問題に解答するといふ先入主を持つてゐる。種族の問題は現代のあらゆる民法及び商法を充たしてゐるが、愛の問題は明瞭に述べられてゐない。必ずしも古代に於てのみならず、基督教が出現してからも尙さうである。何故ならば單に、結婚と賣淫との解決を提出することが極めて不充分であるから。政治家は單に人口に觸れる分面のみを見て來た。故に結婚は法律に依つて規定され、子を産まざる愛は卑しむべしとする。而も時代の奴隸として産れても愛は文化に依つて、それから自由である傾向を持つことが明らかである。單なる生殖の方法の代りに、それが目的となり、それ自身名稱を、嚴とした名稱を作つた。吾々の庭園は、實を結ばないためにより美しい花を植ゑてゐる。何故、愛の二重の花冠が庭園の實らない花よりも不名譽でなければならぬのか？」

性心の理

性愛の技巧

タルドはその解答をしてゐる。即ち現代の政治家は權力や富力に飢ゑた單なる野心家で、彼等が戀人である場合でさへも、ヴァーチルではなく寧ろドシ・ジュアンである。其處で彼は續けて言ふ。「未來はヴァーチル式の者に歸する。何故ならば、權力の野心アメリカ或はヨーロッパの資本主義の富力が、嘗てはより高く見られたとしても、今では、愛が益々精神の最良であり最高である部分をそれ自身に惹き寄せる。(其處には科學と藝術に於ける最大であるところのあらゆる隠れた醜態が横たはつてゐる)そればかりでなく、又愛は益々これ等科學的及び藝術的人物を増加する。そしてその人々はその平和的活動に志して、事務家と政治家とを恐れ、やがては彼等を驅逐するに至るだらう。これは確かに人類の大革命であり、精神的革命である。亂れた、膨脹的奪掠的、野心的方面が負けて瞑想的思索的人間精神の愛人の方面がより多く認められ、のである。その時には社會問題の最大なるもの一つは戀愛の問題でゐることが下されるであらう。そしてこの問題が凡てに於て最も喧しいものとなるであらう。

第二部 生殖の科學

生殖科學

性愛技巧に對する生殖科學の關係——受胎條件としての性的慾望と性的快感——生殖作用は古代に於て淫樂と見てゐる——宗教問題としての生殖問題——人種改良説の信條——エレンケイ及サア・フランシス・ガルトン——子孫に對する吾々の負債——自然淘汰に代る問題——人種改良説の起原と發達——今日の人種改良説の一般的承認——人種改良説をして實際化せしむる二水路——女子に於ける性的責任の意義——強制的母性の排斥——自發的毒性の特殊——母性墮落の原因——妊娠の制限——今日文明諸國の多數に依りてさるゝ實行——「人種的自殺」の詭辨——多數の家庭が墮落の汚辱にありや？——自然的及文明進歩より發したる生殖制限——新マルサス主義の信念と實行との發達——新マルサス主義とは異なる任意的不

妊——妊娠制限の醫學的及び衛生的必要——避妊法——墮胎——實際的墮胎に對する義務の
 新學說——これは如何なる程度まで正しきか？——生殖制限の一方法としての去勢——消極
 的人種改良説及び積極的人種改良説——結婚證明書の問題——議會條例に依る人種改良説の
 不足——遺傳に關する社會的良心の鼓舞——母性の賦與に對する限界——生殖に都合よき時
 ——不妊——人工的愛胎の問題——生殖は最良の年齢——早く母たるの問題——生殖に最良
 の時。

吾々は性愛の技巧が生殖の問題と離れて存在すべき獨立の、又充分に正當權利を持
 つてゐることを知つた。たとへ吾々が今日尙依然として——凡ての人間が嘗ては信じ
 てゐたやうに、そして今でも中央オウストリア人が信じてゐるやうに、(一)——性交
 は種族の繁殖と全然根本的關係を有しないと信ずるとしても、尙性愛技巧は存在する

充分の權利を持つのである。藝術としてより良き表示に於て、これは文明にあつて
 個人の充分な發達のために求められ、そして同じく、殆んどあらゆる地方に於て社會
 道徳の要求として認められるところの關係の堅固のために求められるのである。

吾々が眼を轉じて結婚の第二の要素たる生殖に向ふ時、先づ最初に言ふべきは此
 處でも亦性愛の技巧がその場所を占めてゐるといふことである。古代に於ては、男女
 の性的交渉は、凡て性愛及び性愛技巧の問題が考案外に残された程に何でもない事柄
 であつた。繁殖行爲は初期の基督教の教父がそれを天國に於てなされると想像したや
 うに非人格的に、機械的に行はれ得ると考へられてゐた。この考は最早受け容れられ
 ない。これはそれ自身を男子に薦めることに失敗した。女子に對しては尙更である。
 文明に於ては、(屢々未開人の間にあつても)亂雜に選擇された兩當事者の間に機能を
 充進することは必ずしも容易ではない。特に選擇された者の場合でさへも時にさうで
 ある。同時に吾々は極めて著名な婦人科醫の權威に依つて、妊娠を成功せしめるには

多くの場合、關係したのみでは充分でない、それと共に機能充進を起す必要がある、といふことを教へられてゐる。

(註一) スペンサア及びギルレン、「中央オウストリアの北方民族」三百三十頁。

中世紀の神學者と同じく、多くの元始的人民は、女子の側の性的興奮が妊娠に必要であることを信じて來た。但し彼等はこの信念を時として非科學たる單なる迷信と混同してゐる。その信念そのものは最も慎重にして經驗に富んだ近代婦人科醫に依つて支持されてゐる。即ちマシツ・ダンカンは「女子の不妊」の講演に於て「女子に於ける性的慾望の缺乏と、その關係に於ける快感の缺乏とが不妊となる有力な原因である」と論じた。彼は統計表を提出して殆んど不妊四百人の内、僅々四分の一のみが性的慾望を覚え、半数以下が關係の快感を覺えたといふ事實を示した。然し妊娠する女子に就

いての統計がないので、これに依つて絶對の説明をすることは出来ないが、その可能性だけは認められるのである。

キツシュはそれよりも近年に於てこの問題を論じて次の結論を得たといふ。「女子の性的生活」に於て「關係中に女子が實際に性的干渉をすることは、妊娠を生ずるの條件といふ鎖の中にある重要な一環である。これは分泌物を多量にして精液の通路を軟滑にし、且つ子宮を少し降下して精子の注入を容易ならしめる。キツシュはかく言つて、月經の初潮が性的興奮に依つて助けられるといふ事實にも論及してゐる。

或權威ある研究は女子にあつて強烈な興奮が生じない間は決して妊娠しないものであるといふ、餘りに極端な説を立てゝゐる。睡眠中或は痲痺中にも妊娠が生じることがこの説の反駁となり得ないことは事實である、何故なら吾々はその状態の無意識が必ずしも完全な性的興奮を生ずるのを妨げないことを知つてゐるから。然し、結婚後數ヶ月或は數ヶ年の間、妊娠しないことが多い事實と、妻の側の關係に於ける性的充

足は、その期間には生じないことが多いといふ事實と、この二事實を結合するのは間違では決してないのである。

性 の 心 の 理

ピナアドは言ふ。(一)「あらゆる人間の本能の中で、生殖の本能は元始的狀態のまま残されたる、そして何等の教育をも受けなかつた唯一のものである。即ち吾々は今日彼等が石器時代に生殖したと同じやうに生殖してゐる。人間生活の最も重大な行爲、あらゆる行爲の中で最も崇高なるもの、即ちそれは生殖の行爲であるが、それを人間は今日、穴居時代と同じ不注意を以て行つてゐる。」そしてピナアド自身は生殖行爲に就いての注意を喚起するに努めたが、この陳述には尙悲しむべき眞理が多く含まれてゐる。ウエスタアマアクはその道徳觀念に就いての大きな歴史(二)に於て書いてゐる。「未來の時代は、人間の運命と没落を共にする最も重大な、隨つて最も達し難い機能を生く個々人の氣まぐれと淫樂とは、委し去つた時のことを、恐怖の念とも言ふべ

きものを以て振り返るであらう。」

吾々は彼の「卓子物語」に於て、大ルウテルが常に、人間を創造する神の方法が極めて愚であると口癖に言つてゐたといふ事實を教へられる。即ち若し神が彼ルウテルを神の相談役として呉れたならば彼は全人類を、恰も神がアダムを創つたやうに、「地上外のもの」として創つていたゞきたいと、神に忠告したのであらうと言つてゐる。

ルウテル時代に於て通常行はれてゐた生殖の注意なく思慮なき方法(現代に於ても依然として多くはさうである。)に適用すれば、この改革者の意見には健全な常識が含まれてゐる。若しかゝる方法で生殖を持続しなければならぬならば、寧ろあらゆる人間を新しく地上外の生物に創り上げる方がましである。その方法に於て兎に角吾々は惡遺傳を輕減し得るから。然し神に責任を歸することは決して正當ではない、世界を善くし或は悪くするのは、人間を産出するところの男と女とである。然るに彼等は社會の害惡を彼等自身以外の或物に置かうと求める。彼等は如何に人間の多くが缺點

生 殖 の 学 科

を持ち、条件を具へず、反社会的で、凡ての美しい人間生活を指導し得ないかといふことを知つてゐる。これは屢々古代の宗教的言葉の内では「悪魔の子たち」と呼ばれ、ルウテル自身も世界の悪を悪魔の直接干渉に歸したことが少くない。而も社會の車道を塞ぐこれ等の条件を具へない人々も結局、實際に於ては人間の子たちである。この問題に於て吾々が正當に呪詛し得る唯一の悪魔、それは即ち人間である。

古代ヘブリユウ人がその種族的神の口から出たと稱する「産めよ、殖えよ」の命令は、クラツカンソオプの指摘した通り(三)、世界中に僅かに八人の人間しか存在しなかつた時に發しられたと想像される命令である。若し世界中の住民が一人の指に依頼し得るやうな時が再び生じたならば、その時には、クラツカンソオプの言ふ通り、かゝる命令も又合理的のものとなるであらう。然し吾々は記憶しなければならぬ、——今日人類は世界中に、少しも生れる必要のない者を數千數万といふ率を以て産出してゐる。そしてエホバのその聲は今や、人類の指導者を通じて全く違つた意味を以てそ

れ自身が聞えてゐるのである。

この事實が一般に承認され、従つて、民族繁殖の問題は新しい意義を持たなければならぬ、否、新しい宗教的運動の性質をさへ帯びる傾向にならなければならぬ。これは驚くには足りないことである。單なる道徳は吾々自身を民族の未來に干與せしめるやうに導くことは出来ない。そして昔にあつては、人間は宗教の利害を單なる道徳に従屬せしめる傾向に反對するのを常としてゐた。基督教に依つて實に屢々、實に力強く叫ばれたところのこの主張は、その底に健全な自然的本能を含み、再び今日更に智的形式を以て復活したのである。民族の要求は宗教の要求である。吾々はその要求を吾々の道徳に従屬せしめてはならない。道徳なるものは、實際、吾々の通れ得ない社會的秩序の避くべからざる一方面である。然し、そのために吾々に託されたる最高の利害を犠牲にして道徳を崇拜物たらしめることは不可である。若しさうする者があれば、それは既に死刑執行命令書に署名したものである。この見地から今後の人生

のための用意と準備とを必要とする深刻な信念を持つてゐるところの基督教全體は、人種改良説の準備となつて來た。吾々自身の中にそれ自身が教へる以上の高い理想を教導する教師となつて來た。それ故吾々は人生の人種改良説が發達する根據の堅實なことに驚いてはならないのである。

(註一) 千九百八年三月、巴里醫學會。

(註二) 「道德觀念の起原と發達」二卷、四百五頁。

(註三) 「人口と進歩」四十一頁。

民族創造に對する獻身の新運動を行つた最も顯著な先驅者は、その宗教的性質を獨立的に悟つてゐたらしく思へる。この態度はエレン・ケイ及びフランシス・ガルトンに等しく認められるのである。エレン・ケイは、その「子供の世紀」(英譯千九百九年)に

於て、全く彼女自身を人種改良説の運動と一致せしめてゐる、又他の場所で(「戀愛と結婚」四百四十五頁)かう書いてゐる。「これはやがて時の問題のみである。その時が來れば性的結合に對する社會の態度は、結合の形式を主とせず創造された子供の價値を主とするに至るであらう。そして男女ともに、基督教徒がその魂の救済に獻身すると同じ宗教的熱誠を以て、この性的職務の精神的及び肉體的完成に對して獻身するに至るであらう。」

サア・フランシス・ガルトンは數年後、千九百五年に、然し勿論獨立して「結婚制限」及び「宗教に於ける要素としての人種改良説」を書いてゐる。(「社會學會の社會學報」第二卷、十三頁、五十三頁)即ち、「古代の倫理と風習とに基礎を置く宗教的教義は、それを進歩した人民の要求と一致せしめるために、註釋を新たにされなければならぬ。今日のそれは吾々の風習と職業とが不正の諱辯なしでは調和し得ないほど既に現代の要求に遅れてゐる。私の考に依れば、英國に於て、今日の理解と要求とにそれを

適應せしめるためには、吾々の宗教の訂正よりも更に數箇のものが必要であるやうに思はれる。……進化は大なる幻燈である。然し、人間意志の智的行爲が、或小さい範圍に於て、その道程を指導し得るといふことを知れば、更に限りなく興味ある光景を見る事が出来る。人間は、人類の進化が關する限り、これを廣く行ふ力を持つてゐる。彼は既に有機的生活の平等と配分とを實に廣汎に行ひ、従つて地球表面の變化は單に伐森と農作とを通して見るも、月世界の遠い距離から認める事が出来る。人種改良説は希望に充ちた、そして吾々の性質の最も高潔な感情の多くに訴へる生殖的信條である。」

あらゆる大運動に於て常に生ずることであるが、此處にも數人の熱狂者があつて、生殖の崇高な宗教的重大に於ける信念を不合理に移し去つた。即ち、これ等熱狂者の一人たるヴァシエ・ド・ラブヂュは、初期基督教々父の或者と同じ精神を以て、生殖を離れたる性愛は變態性慾のセーディスムや男色に比すべき間違であると言ふ。生殖

のみが性愛の關することであり、それは「法律に依つて規定されたる社會的義務」とならなければならない、而もそれは慎重に選擇された者のみの行ふところで、生殖力を奪はれた者には禁じなければならない、又、事情に依つては墮胎と嬰兒殺しをも強ひなければならない。ロマンチックの戀愛は選擇の經過に従つて消滅してしまふであらう。(ヴァシエ・ド・ラブヂュ「性的道德の危機」)

愛が生殖の自然的門戸であり又常にあらねばならないことは説明するまでもない。かゝる生殖熱狂論者の極端な議論は念頭に浮ばないものでもない。そして彼等は吾々に性愛技巧を更に力を籠めて述べる必要のあることを感ぜしめるのである。

「吾々が子孫のために何事かをしなければならぬ程、子孫は吾々のために何かをして呉れたのだらうか？」と一皮肉家は言つた。これに對する答は極めて簡單である。即ち、彼が在る凡て、彼が在り得る凡てはその創造である。彼が爲し得る凡ては、そ

の勤勉に集積された傳統の結果に外ならない。彼が人類から與へられた善き賜物を支拂ひ得るのは、たゞ、より良き子孫の創造への努力に依つてのみである。(一)この現世生活の範圍内にあつて、實際の授與者に返し得ない利益と親切とを受けた多くのものがその代りにそれと同じものを他人に返すことに愉快を覺えると同じ道理で、吾々は支拂ひ得ない祖先から受けた遺傳を、吾々の子孫に、より良き形にして手渡すことに依つて救はれるのである。

勿論人種改良の理想の發達が大部分宗教的感情に基づいてゐないことは事實である。これは主として社會改良への極めて徐々たる、然し理解に富んだ運動から出發したものである。この社會改良運動は一世紀以上も前から起つて、人生のあらゆる状態をより善くしようとする進歩的努力を持つてゐた。そしてこの運動の理想は十八世紀に要求され、十九世紀の初期に至つて、衛生改良の近代的組織の開始と共に、工場法の發達と共に、社會主義並びに個人主義に依つて生れたあらゆる諸運動と共に、宣言

されるに至つた。その避くべからざる傾向は徐々に根を張つて來た。初めは大人の生活状態を改良することは比較的効果がないと思はれて、子供・幼児、胎兒に向つて注意が集中せられ、そしてこの結果が、ピナードを主唱者とする胎教運動となり、遂に問題は生殖といふその根元に持ち來され、人生の第一條件としての團體及び個人の性的選擇の制定といふことになつて來た。此處に吾々はサア・フランシス・ガルトンが明瞭な生きた實際的研究とした人種改良學を見る。それを廣義に解釋して彼は定義してゐる、「肉體的にも精神的にも未來の民族性に影響する社會的人種改良説を取扱ふ科學」である。人種改良説は、ガルトンが他の場所で言つてゐる通り、そのより廣い方面に於て「より慈悲的であり而も同じく有効な他の所有に依つて自然淘汰に代らうとする人間の試み」である。

(註一) ヘイクラフトは言ふ。(「ダアウイン主義と種族進化」百六十頁)「吾々に先

立てる者より受けたる負債を、吾々は後に來る者にのみ支拂ひ得る。」と。

性心の理
サア・フランシス・ガルトンはその「民族改良」に就いての「半生の記憶」(千九百八年)の章に於て、人種改良學に關する彼の考の起原と發達とを述べてゐる。人種改良説といふ言葉を彼が最初に使用したのは千八百八十八年、その「人間才能」に於てであるが、その考は千八百六十五年、或はそれ以前から抱いてゐたのである。ガルトンは更に最近、「人種改良説の根據の可能性」に關するハアバアト・スペンサア講演に於て(千九百七年)、又社會學協會の前に讀まれた學報に於て(千九百五年「社會學報」一卷及二卷)、更に他の場所に於て、この人種改良説の問題を論じた。この問題に就いての彼の多くの論文は今日、社會問題に對する人種改良説の態度を更に廣くし通俗にするために、千九百七年創設の人種改良教育協會の手で集め出版せられてゐる。例の「人種改良評論」はこの協會から發行せられる。これよりも今少し科學的方面の人種改良

學生の科學

研究はサア・フランシス・ガルトンの創設したロンドン大學の人種改良學教室に於てせられ、今ではカアル・ピアソン教授の統計學教會と連絡を取つて研究されてゐる。この或はこれに類したカアル・ピアソン教授の統計の多くはガルトンに依つて最初始められた思想と暗示とを完成したものである。(例へばカアル・ピアソンのロバート・ボイル講演「自然的人種改良學の國家に對する範圍と重要」を見よ。)カアル・ピアソンが他の人々と共に編輯した「統計」は人種改良説に就いての多くの統計的論文を含んでゐる。ドイツに於てもこの問題は喧しく研究せられ、アメリカに於ても時々「月刊通俗科學」がこの問題に關係ある論文を發表してゐる。

一時は人種改良説の運動に對して嘲笑する傾向があつた。これは人間が獸類を生むやうに人間を生まうとする試みであると認められて、この新運動を一掃するのは極めて容易であると考へられてゐた。然し今はより良く理解され始めてゐる。熱狂者を除

けば何人も規則に依つて結婚の効果をあらしめるために性愛を減ばさうと夢見る者はゐない。これは單に、相手を選択し得る配偶のあり得べき数を減じようとする問題で、未開人間にも常に行はれて來たのである。(何故なら、言はれてゐる通り、この「人種改良説は最古の科學である」から)この問題は單に形を變へて來た。吾々は機械的に階級に依つて制限する代りに、情的配偶の選擇を智的に實際的の適否に依つて制限しなければならぬ。混雜な結婚は決して法則とならなかつた。選擇の可能性は常に狭く、そして最も元始的人民は最も著しい自己抑制を示して來た。それは單に遠い民族間に於てのみでなく、吾々ヨーロッパの祖先間に於てもさうであつた。カソリック教が優勢を占めてゐた時代を辿つて、宗法は結婚に對する妨害を増加した。例へば四等親の結婚を禁止する如き專擅に依つて、有り得べき配偶の数を減じたのである。少くともそれは更に合理的な人種改良説の命令が制限する程度の制限であつた。

今日に於ては、生殖の自意識的制限の主張——即ち個人の利己的目的のためでなく

疾病を撲滅するため、人類の災害を減ずるため、單なる量の卑しむべき理想を質の理想と變へることに依つて人道の一般標準を高めるためのその主張は普く病理學者、胎生學者、神經病學者、乃至社會學者、道德學者の認めるところとなつてゐる。

この點に關する顯著な權威者の意見を引用することは容易である。即ちバレンタインは先天的病理學に關する大論文の中で、人種改良説は世界の最も緊迫した問題であると結論してゐる。「精神病雜誌」主筆ルイズ・ロビノウイツ博士は、千九百五年、心理學の羅馬學會で讀まれた論文中に同意味のことを述べてゐる。「人民は未だ生殖機能の精力を、精力の權威にまで高めてゐない。他の吾々に知られてゐる精力は、如何に下らないものであるにもせよ、久しい以前から廣く利用されて、それ等の活動は嚴密な經濟の原理に立脚してゐる。この經濟的利用は法律的規定の何等の強制に依つてではなく、確たる進歩的人間の智慧に依つて持ち來されたのである。やがては生殖機

能の經濟的利用が、他の精力の經濟的機能と同じく、人民の確たる進歩的な智的發達に依つて行はれる時が来るであらう。」

一般生物學からは、社會學的方面からと同じく、この同じ立脚地が次第に普遍的に容れられて來た。それはこれが久しく進行中にあつた運動からの避くべからざる分派であるとして認められるからである。

性 の 心 理

ヘイクラフトは言ふ。「ダアウイン主義と民族の進化」(百六十頁)「社會の輿論は、出産する男女はその子供が殘酷或は苛酷に従はしめられないやうに見てゐる義務と責任があるといふ社會法則の中に、それ自身の考を表現してゐる。然しこれは今一步進めばかう言ひ得るのである、即ち、男女は、その肉體的缺點から考へてその配偶と共に苦しみを忍び、そして不當の争ひを持続しなければならぬことが確實に解つてゐる時子供を産まないといふ義務を持つべきである。」アントン・フォン・メンゲルは言ふ。青春の男女は或る事情の下にあつては出産が罪惡であることを教へられなければなら

生 殖 の 學 科

ぬ。同時にたとひ健康であるにもせよ妊娠の自發的制限を教へられなければならぬ。この教はメンゲルの言ふ通りこの方面での如何なる立法よりも先づ第一に必要なものである。

近年になつて多くの著書及び講演が人種改説の方法を辯護するに至つた。例へば人種改良教育協會長、モンタギユウ・クラツカンソオプの「人口と進化」(千九百七年)を擧げ得る。(同時に千九百六年出版ハヴエロツク・エニスの「十九世紀以後」の中「人種改良説とヴァレンタイン」を見よ)尙、今から約三十年前、チイ・エツチ・クラツバアトン嬢はその「科學改善論」(千八百八十五年、十七章)に於てこんなことを言つてゐる。

——單なる慎重な動機を離れて新マルサス主義の方法に依つて認められる自發的生殖制限は「社會的位置の新しき鍵であり」又「自然的再生」のための必要な條件であると。カアル・ピアソン教授の「人種改良説の根據」(千九百九年)は恐らくこの問題に就いての最良の簡單な入門書であらう。サレイビ博士の解り易い熱心な調子で書かれた

「家系と民族の教養」(千九百九年)も亦舉げていゝものである。

人種改良説の一般原理が、民族の標準を高める健全な方法として、現在如何に廣く受け容れられてゐるかは、千九百五年の社會學協會大會に於て示された。その時にはサア・フランシス・ガルトンが機關紙の學報を朗讀するに續いて、出席した、或は意見のみを寄越した各國の社會學者、經濟學者、生物學者、著名な思想家の意見が次々と述べられた。その内二十一人の者は兎に角無條件に賛成し、僅々三四人の者のみが異議を申し立てた。然し多くは枝葉に互る點に就いてであつたといふ。(千九百五年出版、社會學協會「社會學報」二卷。)

性 の 心 理

民族の高上のための生殖制限に對するこの衝動は如何なる水路に依つてそれ自身を實際生活の内に表示するかと訊くならば、吾々は少くとも二つのかゝる水路があると答へていゝ。即ち(A)男子と共に女子の間の性的責任の成長しつゝある感覺と、(B)

生 殖 の 學 科

妊娠制限に對する方法の一般的採用に依つて近年成功して來た生殖制限の征服である。

近代社會の性的生活の修正に於ける一要素として女子の個人的責任が重大な意義を持つてゐることは既に前章に論ずる必要があつた。此處では唯、性的世界に於ける彼女自身の個人を支配する女子の自治的權威が彼女の側に、熟慮すべき生殖行爲に對する承認を包含してゐるといふことを指摘して置けばいゝのである。吾々はこれを新しい殆んど革命的な要求であると考へ易い。然し言ふまでもなく、彼女自身の承認なくして母となるべからずといふこの考は、女子の自然な、古代からの認められた特權である。アラビアンナイトのイスラムの世界に於てさへ、或女の「徳と勇」とに與へられた素晴らしい賞讃を見る。その女といふのは睡眠中に強奪され裸體にされ大道に放棄されるが、その凌辱せられた結果として生れた嬰兒に就いて彼女は言ふ。「私の承認なしに生れて來た子供の神の前に、私は責任を帯びたくない」と。この物語が語つてゐる

是認は明らかに、イスラムの社會では女子自身の熟慮した意志に依る以外には子を生まないやうにするのが正當であり人間的であると思はれてゐた事實を示してゐる。吾々は後になつて國家が子供を要する、そして子供を産出するのが女子の義務であり職務であると言ふことに慣れて來た。然し國家は最早その意志に反して女子を凌辱する者より以上の権利を持つてゐないのである。吾々は今や、若し國家が子供を欲するならば、女子を出産に對して氣持よくせしめなければならぬ（自然にして正當な状態下であればそれは失敗しないのであるから）といふことを知り始めた。『女子は人類の問題を解決するであらう』と、イブセンは或時言ふ。『而も彼等はそれを母としてするであらう。然しながら如何なる問題も動物的歡喜の權威にまでも到達しない無意識の行爲、救へない、欲しない行爲に依つて解決されようとは考へられないのである。』

母たることが強制されてはならぬといふ女子の要求は、彼等が如何なる條件にても

母たることを好まないことを意味するといふ風に解釋されることがある。二三の場合にはさうでもあらうが、如何なる國に於ても、精神と肉體との健全な女子の多くの場合はさうでない。反對に、この要求は通常、今日母たることを斷たれてゐる多くの女子に向つて母たることを擴張しようといふ考と連結されないまでも、母たることに光輝あらしめようといふ望みと連結されるのである。數年前ヘンリー・ソマアセット女史は書いてゐる。（千八百九十五年四月、「アライナ」誌）歡迎さるゝ子供』「私の想像するところに依ると、生殖力の絶頂及び極致の裡には決して猥褻なものはなく、寧ろそれは民族の最高光輝であるといふことを若し吾々が認めたならば、この人生は現在よりも懐しくなり高尚になるであらう。けれども若し意識的に自ら進んでする母たることが民族の極致であるとすれば、無意識的の強制される母たることは正にその反對である。……男女が女子に與へられたあらゆる機能の中で最も神聖なものは一人自由意志で行はなければならないといふことを知る時にのみ、彼等は次のやうな子供を世

界に産出することが出来るのである。その子供は自分自身の裡に生きようとする喜ばしい希望を持ち、そして最も甘味ある子供の特権、即ち彼等がその義務たる愛の太陽の中に展開し得ることの確實を、要求する。」エレン・ケイも同じことを言ふ。「戀愛と結婚」十四頁、二百六十五頁。即ち、歡喜なき母性（その中には結婚の白い墓がある）に女子を限りなく強ひる昔のプロテスタントの宗教的精神の暴虐が今や破壊されかけてゐることを指摘して、意識的の母性の特権を高唱してゐる。彼女は女子がその個性の他の要求のために、母たることを彼女自身が避けてもいゝ三四の例外を許してゐる。尤も「大抵人類に奉仕するために母たることを拒む女子は、戦の前夜、自分の血管を開いて來るべき争闘のために準備する兵士のやうなものである」と。又ヘレネ・ストツケルは母性を今日女子のなす發達した要求の一つであると認めてゐる。彼は言ふ。

（千九百六年、「戀愛と女性」の序文）

「若し、今日女子のためにもあらゆる善が、——智的の訓練、經濟的獨立、生活の幸

福な職業、尊敬される社會的地位——と同時に等しく無論のこととして、必要なこととして、結婚と子供とが要求されるならば、その要求は最早數年前とは異り、荒野の説教者の聲を響かせないであらう。」

多數者の眼に映する母性の墮落の原因は、半ば問題の如何なる聲にも女子を干渉せしめない傾向にあり、半ばはエツチ・ヂイ・ウエルの言ふところの（千九百六年）「社會主義と家族」。「その社會的職務を放棄して、その閑な時、つまり何か下らない工業的製品に屬する半機械的の要素に寄與することに依つて生計費を儲けながら、その片手間に子供を養育するといふ女子の恐るべき誤謬」にある。既婚婦人の働くことを許すべからずといふ主張は、實行不可能でもあり、且つ望ましくないことである。何故なら世の中の仕事は凡ての者にいゝのであるから。イギリスの勞働婦人中の三十パーセントは既婚婦人或は寡婦であると言ひ、（ジエームス・ハスラム、「英國婦人」千九百九年六月）ランカシャア工場のみで、千九百一年には十二万人の既婚婦人を使用したと

いふ。然し女子の賣買の仕事が常に母としての仕事に道を譲るべきことを整へるのは國家にとつて易々たることであらう。既婚婦人に職業に就くことを禁ずるのは望ましくない。何故と言ふに、既婚婦人、と言ふよりも寧ろ母が未婚婦人よりも適するやうな職業も存在してゐるのだから。これは教授といふことに關して著しい。既婚婦人の教師に、自由な時間と缺席の許可といふ特權を與へることは、良政策であらうと思はれる。智識の多くの分野に於て、未婚婦人が最も優秀な教師となり得るにしても、子供たち殊に少女たちを未婚教師の教育的影響下にのみ置かねばならぬといふのは決して望ましいことではない。

民族の高上のための生殖制限に向ふその衝動が實際的生活に入るところの第二の大水路は、妊娠が熟慮した上で望ましいといふ場合を除き、妊娠妨止に對する方法の一般的採用に依つて、あらゆる國の知識階級に依つてである。——そして記憶して置か

なければならぬが、この問題に於ては兎に角、あらゆる階級が次第に知識を得て來始めた。今日にあつては最早この制限は効果如何を論ずることは許されない。何故ならば、これは既に完成された事實であり、現代道德の一部分となつて來てゐるのだから。シドニー・ウェブが旨く言つてゐるが、「若し行爲の經過が他の點では正しい行の人々多數に依つて、習慣的に熟慮的に遂行されるならば、吾々はそれが道德の實際的規定と何等矛盾しないことを確言しなければならぬ。」(千九百六年、「月刊通俗科學」五百二十六頁。これはそれ以前千九百六年十月「ロンドンタイムス」に發表されたもの。)

イギリスのみに就いて言へば、妊娠の妨止は、慎重の又はその他の動機に依り、知識階級の大多數に行はれてゐることが確かである。この事實はイギリスの家庭生活の事實に通曉する者が悉く知つてゐる。即ちトマス博士は書いてゐる。(千九百六年十月

二十日「英國醫學雜誌」千六十六頁、「内外科醫としての私の経験から見ると、氣樂ならざ階級にある若い夫婦の九十パーセントが避妊法を講じてゐることは斷言して憚らない。」この大ざつばなパーセントは實際よりも寧ろ低い位だらうと思ふ。先に擧げたシドニー・ウエブは、「出産率の低下は儉約と洞察との證據を見せてゐる階級に於て殊に著しい」と言ひ、この低下は「全部でないまでも主として熟慮した意志の結果であり」そして「結婚状態の意志的整調は今や一見人民の多數間に、イングランド及びウエルスを通して普く行はれてゐる」と書いてゐるが、その論文の載つた誌上には、又フアビアン協會に依つてなされた詳細の調査が發表されてゐる。これは三百十六家を調査したもので、その家庭といふのは大ブリテンの各地方から勝手に選出された全部中産階級に屬するもののみである。その結果が詳細に分解されて、七十四の家庭は制限を行はず、二百四十二は進んで制限してゐることを發見した。然し千八百九十年から九十九年に至る十ヶ年が最も代表的期間で、百二十の結婚の内、百七が制限し、

僅か十三のみが制限してゐない、而もその十三の内五は子供のない家庭であつた。従つてこの統計に依れば百二十中僅か七の制限しない子のある家庭が報告されてゐるのみである。

大ブリテンに就いて眞實であることは他のあらゆる文明諸國に就いても眞實で、而も文明の程度の高い程、この度も高いのである。そしてこれは出産率の低下といふよく知られた現象に依つて説明されてゐる。近代に於て、この低下の運動はフランスに始まつて、年々の出産数が、徐々に、然し確然と減少して行つた。そしてフランスに於てはその運動は始んど、或は全く中止されてゐるらしい。然しそれ以後他の進歩的諸國に於ては、著しく行はれて來た、アメリカ合衆國でも、カナダでも、オウストリアでも、ニウジランドでも、ドイツでも、オウストリアハンガリーでも、イタリアでも、スペインでも、スイスでも、ベルギーでも、オランダでも、デンマークでも、スエーデンでも、ノールウェイでも。イギリスに於ては千八百七十七年以後引き續い

てゐる。大國の内では唯ロシアのみがまだ採用してゐない。そしてロシアの人民の大多数は、他の諸文明國民よりも教育に乏しく、貧乏で、死亡率が高く、病氣が多いのである。

實際出生率の低下はその全部を生殖の意識的制限に歸することは出来ない。或人は言ふ。勿論文明状態に共通の他の或要素、即ち女子が比較的年遅れて結婚するといふことが家庭の出生数を減少するのは事實である。然しこれを引いて考へても矢張りその低下は眞實で且つ大きい。例へばアースア・ニウシヨルムとステヴンソンの解剖、同じくユウルの解剖を見れば證明される。(これは共に千九百六年四月、「王立統計協會雜誌」に發表)

或人は想像する、カソリック教會が不完全な性交を禁止してから後、生殖制限のためのこの運動は、非カソリック教徒の間よりもカソリック教徒の間に、相對的に益々増大して來たものである。然しこれは條件の下に於てのみ眞實である。アイルランド

に於て出生率の低下しなかつたこと、及びその低下率がアイルランド系を多分に持つてゐるランカシアの町々でも著しくないことは全く事實である。然しベルギー、イタリア、スペイン、その他の重要なカソリック教國に於ては出生率の低下する現象を見せてゐる。實際のところは教會が(教會は常に性的問題に就いては喧しい)近代運動の重要なことを知り、そのより無智な無教育な子供たちに、不完全な性交は死に價する罪惡であると宣言すると同時に、より教育ある人々の仲間とはこの問題の質問を避けることに依つて自分自身をそれに適應せしめたのである。この問題は千八百四十二年に、ル・マンズの僧正ブウヰエに依つて羅馬法王の審判に移された。ブウヰエは法王(グレゴリイ十六世)に、妊娠の妨止が極めて普通になつて來てゐること及びそれを死に當る罪惡として扱ふことはその結果後悔者をして懺悔から遠ざけるものであることを言つた。充分に熟慮した後に、キュリア・サクラ・ボエニテンチアリアは、射精前に撤退するといふ普通の方法に就いて、これは男子の惡行爲に歸すべきである故に、

これに同意するやう夫から強ひられた女子は罪惡を犯すことにはならないと指摘した。そこで、カソリック教徒に於ても他の非カソリック教徒に於けると同様、避妊法は進歩と文明とに従ふこと、そしてカソリック教徒に依る方法の一般的風習は單に時

の問題であることが解るのである。

性 の 心 理

時々多くの熱心な人々から、出産率の低下には終りを告げしめなければならぬ、何故ならばそれは「民族自殺」を意味するから、と喧ましく要求された。然し今日にはこの叫びが愚論で而も甚だしく間違つてゐることが知られかけてゐる。吾々は如何なる大都市の道路をも、出産率が尙その健全な制限を遙かに越えてゐることを認めず歩くことは出来ない。それ程大都市の道路には一見して生るべきではなかつたやうな人々の多數を以て充たされてゐるのである。最大の國家は屢々市民そのものに就いて言へば最少のものである。何故ならばそれに必要なは量ではなく質であるから。そし

生 殖 の 學 科

て最良の市民の増加のみが國家を富強にし得ることは事實であるから、人民が單に避妊を放棄することに依つて繁殖すべきことは今や堪へられなくなつて來た。この經過はたゞに國民の質を低下せしめるのみならず、國民の上に不當の經濟的負擔を課するものであることを悟り始めなければならぬ。

大家族が退化と關係のあること、又廣い意味に於てはあらゆる種類の變態性と關係のあることは、現在よく認められてゐる。即ち、天才の士が極めて大家族の家庭に屬する傾向を持つてゐるのは事實であるが、然し、家族制限の傾向から天才の驚くべき減少を恐れる人々に對して、屢々天才の子供に依つて占められる家庭の地位が長子であることを指摘することが出来る。(ハヴェロツク・エリス「英國天才の研究」百十五頁——百二十頁參照) 狂氣、白痴、暗愚、薄志、罪人、癲癩、ヒステリー、神經病、結核、その他凡てかうした傾向は大家族の家庭に屬し易い。(ツウルウズ「白痴の原因」九

十一頁。ハリエツト・アレキサンダ「マルサス主義と退化」(参照)單に長子のみならず次子も特に病理的缺陷に悩むことの多いことが、實際、ヘロン、ピイアソン、ゴリンダ等に依つて證明されてゐる。然しこの事實の普通の説明は必ずしも正確ではない。ヴァン・デン・ヴェルデンに依れば(千九百九年五月の「性的問題」に引用された通り)この傾向は長子が生れてからの子供死亡率の増加に依つて充分に平衡される。従つて早く生れた子供のより大なる病理的傾向は單に死亡に依る嚴密でない選擇の結果である。このことを離れて彼等が何等かの病理的傾向を實際多分に持つてゐる限り、それは恐らく機の熟さない結婚のためであらう。屢々言はれる小家族の子供は大家族のそれよりも虚弱であるといふ説も正確ではない。吾々はそれが自然的の小家族が、或は人為的小家族かを識別しなければならぬ。兩親の虚弱な生産力の結果としての小家族ならば、それは虚弱な家族であるかも知れないが、兩親の熟慮した制限の結果としての小家族ならば勿論かゝる傾向を示さないのである。

國民的有効の要求はかくして發達する人道主義の要求と一致する。これは人生の狀態を改善しようとする試みから始まつて次第に、益々深く入つて人生そのものを改善するの必要を悟り始めた。然し人道的熟慮を悉く別問題としても、生殖制限の方面に於て文明の進歩を遮止しようとする試みの大誤謬は、若し動物進化の一般傾向が、その根本に於てでも了解されたならば決して生じなかつた筈である。凡て動物界の進歩は多く産することから少く産することに向つてゐる。種族が高ければ高いほど出生率は減少してゐる。これと同じ傾向は一定の直線内にはないけれど兎に角人類の世界にも認められるのである。即ち文明の發達は出生の減少を含む。そしてこれは決して新しい現象ではない。古のローマ、後のゼネヴァ「新教徒のローマ」はその證據を見せてゐる。今日その傾向を測る材料が存在してゐないけれども、道德的並びに知識的教養のあらゆる高い中心に、これが生じたことは疑ふの餘地がない。吾々は充分に廣汎な